

---

# 臭に碧く

そらかける

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

昊に碧く

### 【Nコード】

N2847X

### 【作者名】

そらかける

### 【あらすじ】

時は五代十国時代中期。

呉越王が太子・銭弘佐<sup>せんこうさ</sup>はお忍びで大火に見舞われた杭州の街を弟と共に視察を試みた際、弘佐は何者かにさらわれる。

その計画の首謀者は父王・銭元<sup>せんかんげん</sup>？。

なぜ父が息子の命を狙うのか……不安と疑問に思いながら脱出を

試みるとき、金髪碧眼の謎の少女に助けられる。

彼女の名前は香霄<sup>かうせう</sup>。呉越国<sup>こえつこく</sup>の社稷<sup>かみ</sup>。そして弘佐が幼い時に一目惚れした少女だった。

彼女に助けられた、そこは大陸でなく、日本海賊船で?!。

若干14歳の少年王の奇跡の先に待つものは……歴史×ミステリー×ファンタジー新感覚小説！

## 登場人物

銭弘佐<sup>せんこうさ</sup>く秀麗な呉越太子。

香霄<sup>かうせう</sup>く呉越王の社稷<sup>かみ</sup>金髪碧眼の少女。

銭弘<sup>せんこう</sup>?く弘佐の同い年の弟。兄をとても尊敬している。

兄が王になる際「丞相」となり支える。仏教を信じている。少々感情豊かな。

弘純<sup>こうじゆん</sup>く藤原純友の残党。本名は銭弘環<sup>せんかうかん</sup>。

晁衡<sup>せうけい</sup>く弘純の船に乗り込む謎の陰陽師。

銭元<sup>せんかんげん</sup>?く弘佐の父。息子殺害計画の裏にはせつない想いがある。

(pixiv・Blog・フォレストノベルにも転載してます)

## 第一章・夢想（前書き）

携帯で読めるように「当て字」を使っております。  
また誤字脱字のご指摘お願いします。

## 第一章・夢想

1

炎が大地を舐る。<sup>なめ</sup>

悲鳴や断末魔、建物が焰に包まれ崩れる音が耳を貫き、熱風が吹きつけた。

空は黒煙につつまれ、炎の波がまた街を飲み込む。

弘佐は空を見上げ、

ここから始まる。

そう呟いた。

姓は銭、<sup>せん</sup>名は弘佐、<sup>ひろすけ</sup>字は玄祐。<sup>げんゆう</sup>十三歳の少年。呉越王の息子、太子である。

いま、その秀麗な面には笑みを刻んでいた。

皆は恐怖におそれおののいて我先にと、人を押し退けて避難する中、弘佐は一人立ち止りその光景を瞳に、そして胸に刻む。

炎への恐れはない。

むしろ勢いよく燃え上がる炎は爽快だ。

父が望んで建てた宮殿が真つ赤に燃える。

一時しか満たない私欲など燃えてしまえばいい。

任侠上がりの銭鏐が、<sup>せんりゅう</sup>後梁皇帝・朱全忠より爵位をつけ、故郷の地で建国したのがこの呉越。<sup>ごえつ</sup>

首都は杭州、秋には金木犀の黄色い花が散り、甘い香りを放つ街道となる。

そして冬には温暖の土地には珍しく雪が降り積もり白銀の大地となった。

二つの江に挟まれ、大地は潤い、船による文化交流などが盛んであったが、それは王のまわりだけで呉越の民たちは重税を強いられ苦しんでいた。

けれど、この大火。

呉越王、父の欲望も炎に飲まれて消える。

「兄上！」

弘佐は呼ばれてハッと我に返った。

炎に見入られていたせいか、風向きが変わり火の手がすぐそこまできていることに気づかなかった。

弟の弘宗（字は隆道）が息を切り、駆け寄る。

袍を汚して髪も乱みだし、表情は不安にゆらいでいたが、弘佐を見つけて安堵する。

二カ月違いの異母弟は常に弘佐と一緒にいる。けれどこの大火で兄がはぐれたと知り必死に探していたにちがいない。

「探しましたよ兄上、さあ早く」

「ああ……！」

二人は火の粉まう道を避難場所を目指し駆ける。

突然、不吉な音が耳をさき、炎に巻かれた瓦が弘宗の上に降り注ぐ。

「隆道、危ない！」

弘佐は悲鳴じみた声をあげて弟を突き飛ばした。

「兄上！」

弘佐は覚悟してきつく目をつぶる。

けれど、熱は降り注がない。

(え?)

恐る恐る目をあけてみると弘佐の上に降り

注ぐはずだった瓦がパラパラと粉となつて散つていた。

「早く逃げなさい。あなたはここで死ぬべきじゃない」

ハッと声をたどつて見上げる。

そこには十五、六歳の金の髪を有す少女が空に浮いていた。

薄桃の袖の長い外套に、白を基調にした袴、襷レースがたくさんついた

裳……まるで華のような少女だ。

少女の碧い瞳が弘佐を映す。

どこか愛おしげに。

「……君が、助けてくれたのか?」

「ええ」

少女は微笑み、道を指し示す。

そこは青く閑散とした火の手の及ばない道だ。

後方では焰に包まれ赤い世界が広がっているのに、なぜ?

「今のうちよ、はやく」

弘佐は不思議に思いつつ弘宗に無事をつげた。

弘宗も驚いているようだったが、ホッと息をつく。

「よかった……きっと御仏の加護が兄上には

おありなのでしょう」

「いいや、あの少女が……」

「少女?」

「不思議な力で私を助けてくれた……」

「瓦が突然、粉と化したのは目撃しましたが、兄上のおっしゃる少女はみえませぬ」

「……え?」

「そんなことより早く逃げましょう、御仏の加護があるうちに！」  
弘佐はもう一度振り返る、しかしあの少女の姿はもうない。

（あの少女は一体何者なんだろう？）

疑問におもいながら弘佐は弘宗の後をおった。

天福六年（九四一年）『原因不明』の大火により杭州の街はほとんど焦土と化し、無事に避難した呉越王も望んで建てた宮殿が焼失し、それに衝撃をうけ病に倒れてしまった。

## 2

杭州の街に焦土の匂いを伴って夏の風がわたる。

大火の後なので足取りと市の雰囲気ふんいきは暗くピリピリしていたが、張りのある呼び子の声。

ここを慰めようとする旅芸人たちのおかげで少しは明るくなっているようだ。

「はぐれないでくださいよ、兄上」

「それはこっちのせりふだ、隆道」

少年ふたり、人をぬってようやくとなり並ぶ。

ふたりとも薄汚れた衣服を身にまとい、無造作に髪をまとめ、泥どろで頬を汚していた。

一見、孤児の少年にしかみえない。

誰も呉越王の子息、弘佐と弘宗だと言い当てるものはいないだろう。

ふたりはお忍びで焦土と化した街まできていた。最初は弘佐ひとりで皆に知られずにいこうとしていが、

「兄上一人だと心配ですからね」

と、さっそく民に身をやつした弘宗が待ち伏せしていたのだ。

弘佐はちらりと道端を見やる。

そこには自分と同じ年ぐらいの……いや自分より幼い子供が物乞いをしていた。

骨と皮だけの手がのび、しかし、その瞳はうつろで未来を映していない。

混沌として虚ろだった。

「兄上」

ぴしゃり、といさめられて弘佐はハッ、とする。

しらず、足を子供の元に向けていた。

弘宗は手をひいてかぶりをふる。

「相手にしてはいけません、気持ちわかりますが、けれど…施しはほかの者をよびます」

「わかつてる」

弘佐は固い拳を作った。

一方、弘宗は唇をかみしめうつむく。

その顔色は暗い。

「隆道？」

「……私は、どれだけ自分が甘く生きてきたか痛感しています。命じればなんでも手に入る。そう当たり前になっていたようです」

涙をグツ、とつよく拳で拭う。

「民たちは一日の食事にも苦勞し、働き口にもなかなかありつけず、私達たちと同じ年ぐらいの子供などは孤児として物乞いをせねば生きていけない。そして、大火がおきてなお途方にくれる人々が増えた。元凶は父王です。父王があゝの宮殿をたて、民をさらに苦しめた。だから天罰がくだって大火がおきたに違いないのです！」

「隆道……」

弘佐は弘宗の震える背中を撫ぜた。

同じ感想を抱いていることが嬉しい。

あの宮殿が炎に見えるのは心がすいたのは否めないが、同時に家を失って途方にくれる者、ひどい火傷をおって泣き叫ぶ声、もつとも燃え盛る大火の中からの断末魔は二度と聴きたくない、そして繰り返してはいけない。

「そうならないように、私達がなんとかしよう。そうだな……だれもが幸せにくらせる この世の樂園 をつくろうか」

「この世の樂園？」

「戦がなくて飢えのない……みんな微笑んでいられる国だ……隆道、私は必ずこの国を地上の樂園にしてみせる。手伝ってくれるか？」

「もちろん。兄上のために私は全力を尽くしましょう」

弘宗は真剣に頷き、拱手をした。

「よろしく頼むな」

「そういえば、兄上。あの大火で少女をみたとおしゃってましたよね」

弘宗は話題をかえてたずねる。

「昔、兄上が同じようなことを仰っていたのを思い出しました」

「…………え？」

弘宗はくすくすとわらって、

「殺されかけたというのに『だれか金木犀の精を見なかったか？』  
としつこく私や弟妹たちに訊きまわってたじゃありませんか」

「金木犀<sup>きんもくせい</sup>の精…………」

弘佐はハッと思い出す。

数年前のことだったか、侍女が弘佐を刺殺そうとしたことがあった。

けれどそのとき、弘佐はその衝撃よりも、違うものに心を奪われていた。

（そう…………金木犀の精霊に）

だから皆にしつこくきまわった。

「だれか、金木犀の精霊をみなかったか？」と。

けれど皆は「知らない」と首を振るだけで…………。

幻だったのかと、内心とても落ち込み、大きなため息をついたけど。

でもただ一人、渋い顔をした人物がいた。

それは父王だ。

「知っている」とも「知らない」ともいわなかった。

ただ複雑に笑っていた。

もしかしたらご存じなのかもしれない。

それを裏付ける記憶がよみがえる。

ある夜、眠れず院庭を歩いていたら父上の懇願する声を聴いた。

誰かを呼ぶ、懇願<sup>こえ</sup>。

青白い月光に照らされた中庭。

そこに父王が金木犀に向かってだれかの名を呼びつづけていた。

（あまりにも悲痛で……）

だからそれ以上、聴いてはいけなような気がしてそつと部屋に戻ったけれど。

「……もしかしたら金木犀の精霊となにか関係があるのかもしれない」

そう呟いたとき、ふと、弘佐の視界に一人の少女が映った。

「あれは??！」

「兄上?！」

弘宗の呼び止める声を無視して弘佐は駆けだした。  
間違えるはずはない。

金の髪、薄桃<sup>うわぎ</sup>の外套…。

あのと看助けてくれた少女だ。

「まっ、」

弘佐は声をかけようとした刹那、背後から伸びた手に口をふさがれ、横道に連れ込まれた。

おどろいて仰ぎ見ると黒ずくめの男がにやりと笑った。  
急に眠気が襲う。

手巾に眠り薬が含まれていた。

3

宮殿の院庭に、あまい金木犀の香りが満ちていた。

どれも美しく咲き誇り、私は香りに誘われるように庭におりる。  
そして中でいちばん黄色く咲き誇っている金木犀のそばに一人の  
少女が座つていのに気づいた。

金髪碧眼、黄色を基調にした衣裳を身に纏つていて……。  
花の、金木犀の化身だと思い、興味がわいて傍にそっとしのびよ  
るとその少女は泣いていた。

「どうして泣いてるの？」

そう訊くと、少女はおどろいていたようだけれど柔らかく微笑む。  
その笑顔がすごく美しく、私はしらず、胸の衣を掴んでいた。

「泣いてないよ。……欠伸したら涙がでちゃっただけ」

「うそだ」

「うそじゃ、ないわ」

「……どうして泣いていたの？」

「だから……」

私はじつと彼女の碧い瞳を見つづけた。  
すると彼女は、ため息を吐いて、

「あなたのお母様のもっているあの玉牡丹の花弁、あるでしょ？」  
思いついて私はうなずく。

母上がとても大切にしている、白玉で出来た美しく上質な髪飾り。

とても嬉しそうに父にもらったのだといていた。

（あれだろうか？）

「本当は私がもらったはずなのに、私は普通の人には姿が見えないから。取られてしまったの……。まあ、しょうがないんだけど」

また一筋、涙が頬を伝う。

「泣かないで！」

私はあわててその涙を袖で拭った。

「私が、……私がつといいものをあげるから泣かないで」

「無理だわ」

「無理じゃない！」

彼女は目をしばたいてくすりと笑った。

「わかった、もう泣かないわ。あなたが私にいいものをくれる日を待っている。慰めてくれてありがとうね」

優しく、柔らかい手が頬に触れ、ドキドキと胸が高鳴る。

鼓動がきかれないように、きかれていませんように……。

「あなたは、なにものなの？」

かろうじて、そう訊ねることができた。

「私は……人ではないの」

「じゃあ、やっぱり 金木犀の精霊 なの？」

「フフツ、そうよ、いつかあなたの願いを叶えてあげる。それまであなたの記憶のすみに……」

いきなり突風が吹き、地面に散っていた小花が舞い上がる。

「わぁ！」

その風の強さにおどろいて私は顔を覆う。

けれどその風が空に帰ったと同時にどさりと、倒れる音が後方にあがった。

ふりむくと、侍女が匕首を握ったまま、白目を向き、青い唇には一筋の赤い血を流して仰向けにたおれていた。

もしかして、あの金木犀の精霊が私を助けてくれたのだろうか？

（それとも……）

私は雲一つない青い空をみあげた。

「……っ」

夢から醒めると、そこは宮殿の院庭ではなく、薄暗い……見覚えのない部屋に弘佐は寝かされていた。

頭痛がするし、当て身もくらったのか腹部が鈍く響く。

さするうにも両手足を縛られていて、どうにもならない。

——どうして、こんなところに、

「……：そういえば、あの黒ずくめの男に手巾を……あれに眠り薬がしこまれていたのだろうか」

ずつつけられていたのか、それともただたんに、人さらいにあったのだろうか。

どちらにしても油断をしていた自分を恥じずにはいられない。

「不覚、だつたな」

自嘲ぎみに呟くのと同時に、複数の足音をとらえ弘佐はとっさに気絶しているふりをした。

「太子の具合はどうだ？」

暗い部屋に開け放たれた分だけの光が差し込む。

「まだ意識を取り戻されていないようだな」

「少々つよい薬を使いましたので……」

聞き覚えのある声だ。父の近臣だろうか？

「王も気が触れておる。自分の息子を殺せとは……、狂ったように、私に元祐さまを殺せと申されて。ま……あの方が王になると少々操りにくい」

（私を殺したがっている？ 父王が？）

「幸い、二人だけでお忍びをしてくれたおかげで楽に捕らえることができたが……隆道さまのほうはどうだ？」

（……隆道？ 弟がどうしたのだろう……）

「……はっ、警護のものが二人のあとを密かにつけていたらしく、応急処置を施されたのちに宮殿へ。命に別状はないと言うこと。弘佐さまについては捜索隊がうごいておりますが……」

「はやく手を打たなくてはな、ここを探られたら厄介だ」

「毒を用意させましょうか？」

「それがいい、なるべく苦しませぬようにな……」

ふたりはその場から離れていった。

それはきつと毒殺の準備をするためだろう。

「冗談じゃない、そうやすやすと殺されてたまるか！ なんとかここから逃げださなくては、クッ！」

どうにか縄をはずせないかと身じろぎをするが、しかし身じろぎするほどきつく縛られていく。

「くそ……っ」

そのとき、プツン…と、突然、戒めがとけた。

「え？」

不思議におもい、青紫色の痕がついた手首をさすりながら造作なくとけた縄をみつめる。

鋭い刃物はもので切られたような縄の切り口。

「とにかく。これでなんとかなる」

そう、少なくとも毒殺の可能性はなくなった。

5

弘佐は人に注意しつつ棟をでると、そこは広い邸宅の院庭。

天には白い月が高く上がっている。

広く凝った庭で大きな蓮池に奇岩の浮島がありそして幾つかの亭がある。

しかし、すべては薄闇、紺色の影がおとされて色彩はうかがえない。

「……でも、焦土の匂いが届くということは杭州からあまり遠く離れていないということだろうか？」

ならばなんとか、離宮に戻れるかもしれない。

慎重に出口を探すけれど、どこも衛兵が見回って、そしてだんだんと辺りが騒がしくなった。

「なんだ、なにかあったのか？」

「賊が侵入したらしい！」

（賊扱い？）

どっちが賊だろう、太子を誘拐し殺害しようとしたものこそ、賊だろうに。

弘佐は苦笑をうかべながら、どう脱出しようが考える。

もし主犯格だけが弘佐の暗殺計画に携わっているならば、逆に身分を証明して奴らを追捕できるかもしれない。

本当に淡い期待だが。

弘佐は懷を探り舌打ちをする。

念のため身分を証明する印綬をもっていたが奪われていた。

「……こうなったら強行突破しかないか？」

「こつちよ」

「！」

突然、わいた声におどろいて振り向く。

そこには、

「金木犀の精霊！」

少女はシツ、と静にと合図し、微笑む。

「また会えたわね、弘佐」

「どうしてここに……」

「逃げたいならこつちに来て。死にたいならべつに構わないけど？」

「死ぬものか」

「ならこつち」

「あなたは……この邸のものか？」

「まさか」

少女はくすりと笑い、

「あなたの味方よ」

そういう。

「……答えになってない……」

だが、なんとなく納得してしまう。

導かれるままに行くと裏口を見つけた。

遠くに視線を馳せる、そこには闇の帳を裂く灯、不夜城が。

そこが離宮だとすれば近い。

「助かった……」

「まだよ、弘佐」

「え？」

「殺してもいい、決して外に逃がすな！」

ヒュッ……と矢が空を裂き頬を掠めた。

殺氣と殺されるかもしれないという恐怖に総毛だつ。

しかし、ここで死ぬわけにはいかない。

弘佐は全力で駆ける。

何としても生きて、自分の夢を叶えなければならない。

（この世の樂園をつくる）

それが弘佐の夢であり、大望。

大唐帝国が滅んで幾十年、自分が生まれたときから乱世。

華北の朝廷は謀叛、弑逆が絶えず民の安らげる土地などない、地獄。

華南も例外ではない。十の国が王、又は帝を名乗って凌ぎを削り戦を起こす。

いまこの世には本当に民の安らぐ土地などない。

だからなおさら樂園を作りたい。平和な土地を、国を！

「つつ！」

矢が肩に突き刺さり激しい痛みが全身を巡る。

弘佐は激痛に足が竦みその場にたおれるが、それが幸いし、頭上に無数の矢が通りすぎた。

……死ぬものか。

弘佐は齒をギリツとかみしめ、大地に爪をたて、再び力つよく走り出す。

「狙え！」

弓弦がギリギリとしばらく、矢が自分にむけられるのをしる。今度こそ、ダメかもしれない。

「あきらめない、あなたが好きよ」

（いつの間に先にきていたのだろう？）

彼女は強い微笑みを唇に刻み、小さく呪文を唱える。

そのきいたこともない呪文は縷々とあたりに響き、突風が香霄の

指先から生まれ吹く。放たれた矢は軌道を逸れて放った主に返っていった。

「ぐはっ……！」

「ぎゃあ！」

そして、次々と私兵たちは断末魔をあげ、倒れて逝く。

弘佐は少女をまじまじと見つめた。

勝ち誇った顔を。

一体、この少女はなにものなのだろう？

何度も私を救ってくれて、助けてくれる。

そして、なぜか泣きたいほど懐かしい。

そういえば、もう泣くことはなくなっただろうか……。

ふと、そんなことをおもって月明かりに青白く映える少女の顔をみつめる。

少女は弘佐の視線に気づきにこりと微笑むけれどすぐに真剣な表情をつくり、弘佐のもとにかけよる。

「弘佐、傷がすごいっ！」

「え……？」

肩口が鮮血に染まって、じつとりと服を濡らしていた。

それを見たせいか急に痛みが蘇り、フツと一瞬、気が遠くなりかけるが必死に意識を握る。

けれど身体のほうがいうことをきいてくれず、痛みにたえきれない。

足がすくみ、弘佐は少女の膝に身体を預ける。

「死ぬのかな……私は」

「死にはしないわ。それにあなた、私にあの玉牡丹よりいいものを与えるって約束したわよね」

金木犀の精霊はあの時と変わらない笑みをむけた。

弘佐は嬉しくなる。

「覚えていてくれたのか？」

「そうよ」

「金木犀の精霊よ……名は？」

「香霄」

「香霄……」

「しばらく、眠りなさい」

そういい、弘佐の瞼を優しくなせた。

一生懸命意識を握っていたのに、そのやさしい手の温もりが弘佐を眠りへと誘っていった。

6

「良くがんばったわね」

香霄は気を失った弘佐にねぎらいの言葉をかけ、あたりを見回す。追ってくる気配はない。

当たり前だ。弘佐に危害を加える者をすべて殺したのだから。

「さて、ここにこうしておいてもまた誰かくるだろうし、傷は治したからいいとして……どうしたものかな？」

香霄が思案していると突然、草むらが、ガサリ、と動いてひとりの男が姿を現した。

香霄は思わず身構える。

人の身なりをしているが、どこか違和感というか、自分と似た、気配、を持っている。

男は異国の白い服を身にまとい、漆黒の長髪を赤い組紐で結んでいる。

容貌は端正だが切れ長な目尻が印象的で、飄々としたものを感じさせる。

あきらかに大陸の者ではない。

「……お主は……社稷（土地神）か？」

「え？」

「おどろくことはない。……私の母が似たようなものでな。私は……」

…、そうだな、晁衡<sup>ちやうへい</sup>と名のつておこうかな？」

「晁衡……」

「そなたの名を訊きたい」

「……香霄。この地の、社稷」

「やはりな」

晁衡は香霄の正体をいいあてたことに満足して、笑みを浮かべると倒れている弘佐をひよい、と抱き抱えた。

香霄はハッと、晁衡をにらむ。

「なにをするつもり？」

「この少年を私に預けてみないか？」

この少年は高貴な方だと存ずるし、悪いようにはしない」

彼は柔らかな微笑みを浮かべる。

香霄は信じてみることにした。

彼から悪意は感じられないし、何となく信じられる人物だと直感したからだ。

それにこれでも香霄は忙しい身。

あの人のところにいき問いたさなといけな。

「……お願いするわ、でももし弘佐を危険な目にあわせたら承知しない」

「わかった」

頷くのをみつつ、香霄は風に包まれ虚空に消えた。

7

銭元灌は懐かしい気配に目をあける。

彼女が訪れると清々しい風を感じていたが、それも久しくなかった。

元灌は首を傾げる。

寝台に横たわる自分の身体が厭わしと思ったのはこれがはじめてのことだ。

（なにかもがだるく重い）

「……香霄いるのか」

ささやくほどの声音しかでなかったが、香霄は聴き取り領いた。

「ええ」

「声をきくのも久しい気がする」

「わたしはずっとあなたのそばにいたのよ。」

声もきこえなくなったのはあなたの欲望のせいよ」

「欲望か……フ、そなたは、それは叶えてくれはしなかったな」

「当たり前よ。私は社稷よ、土地のため、民のためになることなら叶えてあげるけどね。それ以外のことを聴く義理はない」

「そうだったかな？」

「……そうよ」

香霄はすこし後ろめたそうに答えた。

「すでに予の命が尽きている気がするのだが……」

「いいえ、まだあなたの命数は尽きてない。これはあなたが仕組んだことよ。願っておきながら生きながらえたいという浅ましい計画だからあなたは、苦しくてももう少し生きてなくてはダメ。やり残していることがあるものね」

「……『宣下』のことか……？」

「そうよ」

「怒っているな……香霄」

「ええ。どうして弘佐を殺そうとしたの？」

「……死にたくないからだ」

「矛盾してるわ。あなたは覚悟して願ったのではないの、私に……」

「……たしかに予は願った。『変えたい』とけれどその根本にあるのはささやかなものだ」

「……」

「予は愛しいものの姿を視、声を聴きたいと、その願いの根本には

あつた。だから。

原因である欲望をあの大火ですべて焼き尽くしたかった」

元灌は小さく笑い目をとじた。

「弘佐も……予と同じ運命をたどるのだろうか……」

その言葉を香霄は否定したのかもしれないが、意識は闇へと落ちていった。

「やっと戻ったか！」

弘純はほつと息をついて、ゆっくりとした足取りで船に近づく陰陽師に手をふった。

もう少し戻るのが遅かったらこの杭州を離れていた。

日本の伊予から首領の最期の命をうけ杭州に入港した彼らは、しばらく岸边付近に身を潜めていた。

——しかし杭州の港街にきたときはさすがにおどろいた。

なんせ、大火が発生し天高く炎が踊り燃え広がっていたのだから。もし、ここに弘純一行、とくに陰陽師がこの杭州に現れず、雨乞い をしなければ街はもつと損害を受けていたに違いない。

しかし、大火の後は詮索されるのをきらい、人目のつかない岩影に停泊していたのだが、今日はやけに呉越の兵士らが港周辺を嗅ぎ回る。

怪しまれるといけないので船の移動をすると決めた直後、陰陽師が何処かに姿をくらました。

置いていってもよかったのだが三ヶ月この杭州に停泊する約束だったため置いてはいけない。

——彼の性格からいって約束をやぶった者に報復するのは目に見えている。

その陰陽師がようやく戻ってきたことに安堵と苛立ちを抱いて弘純は駆け寄った。

「おい、は……」

「晁衡だ」

しら、と名の訂正をいれる。

相変わらずの陰陽師に弘純は大きくため息を吐き、恨めしげに睨めつける。

「名なんてどうでもいいだろう？」

「そうか？　なら弘純どのも、『弘環』と名乗ってもいいではないのか？」

「……減らず口め」

不貞腐れて弘純はそっぽを向きかけ、晁衡がその腕に抱えている少年をみて目をみはる。

「そいつは……」

かがり火に照らされた少年の服は鮮血に濡れていた。

怪我をおっているのだろうか、——けれど案外血色はよさそうだし、しかし、その顔……。

「お前に似ているだろう？」

晁衡はくすくすわらって見つめる。

弘純はハッと顔色をかえた。

「もしかして……おい、死にそうなのかこいつは！」

「……さあ。生き倒れるところを拾ったまでだ」

「どうして……っ、とにかく手当てを！」

弘純は晁衡から奪うようにして弘佐を抱きかかえ船にはこぶ。

晁衡は微かに微笑んだ。

## 第一章・夢想（後書き）

■ ■ ■

はじまりました。新シリーズ。

三国時代とはまた違った時代です。

時代背景としてはあの大唐が滅び、北方では血で血で洗う王朝変遷が繰り広げられ南方ではいくつもの国が並び立つ不思議な時代です。呉越はそのなかの一つの国で、基本的には中央王朝を宗主国として仰ぐことで「王」と言う称号をいただいています。しかし、周りは敵国に囲まれています。

ですが、宋時代になるまで最後まで生き残る国です。

外字、おおいです（涙）

例えば弟の弘宗。

本当の字はこちら↓？（きっとPCしかみられない）

しかも三人でてくるので、代字をつかわせてもらっています。そして、のちのち重要になってくる国の名前もでてきません。申し訳ないですが、その時はカタガナで表現します。

PC上ではメッセージで表示します。

周瑜の娘の「大喬さん」も少しだけ参上し、かなしいEDの先も少し書いています。

もしよろしければ、最後までお付き合いください。

## 第二章・東海の手賊

1

「あまのはら……」

ふりさげみれば春日なる……

三笠の山にいでし月かも……」

異国の、歌？

韻<sup>イ</sup>も、どこか独特であるようだけど……。

けれど、好ましい……。

弘佐はその歌を耳にし、誘われるようにして微かに目をあけた。  
燭台の淡い灯だけが頼りの薄暗い部屋？。

……また捕まったのだろうか。

けれど、ちがう。

今度は潮風の匂いがとても濃い。

それに、なんだか大地がゆれている感じた。

「おや、目覚めたか」

衣擦れがしたほうへ視線をやる。

「ここは……どこだ？」

弘佐は問いながら顔を覗き込む男をみつめる。  
けれど薄暗い部屋では相手の顔がなお濃い影になっていて見定め

られない。

男はひんやりとした手を優しく弘佐の額にあてながら答える。

「海上」

たん、とした答え。

「……え？」

「正確には、船の上」

「船？」

「そう」

弘佐はまだハッキリしない頭で、男の言葉を反芻した。

「……海上、船の、上？ どうして……、私はたしか……殺されかけて、香霄に助けてもらって……」

そうだ、なぜ私は海上に船の上にいるんだ！

弘佐は飛び起きるようにして上体をおこした。

「大事ないようだ」

くすり、と男は笑い燭台を近くにおく。

その淡い灯が男の端正な顔を映し出す。

中華の者ではない。

漆黒の長い髪を下の方で緩くしばり、切れ長な目尻が印象的な細面の男だ。

二十をいくつか過ぎたぐらいだろうか。

「あなたは？」

「私は晁衡……日本国の者だ」

「日本……」

日本は、大唐の頃遣唐使などを派遣し国交があった島国。

けれど安史の乱以降鎖国状態ではなかったか。

たしかに彼からは異国の匂いがする。

燭台の灯だけでは頼り無いけれど服装もどこかめずらしい。

肩口に大きな切り口があつて、こちらの袍服より、ゆつたりと着ているようだ。

「あの、どうして私は船に……？」

杭州には港がある。けれど弘佐は港とは離れたところにいたはずだ。

少なくともあの邸から逃れるまでは。

？？なのになぜ、海上に？

「私があなたを拾った」

「拾った？」

弘佐は怪訝に聞き返す。

「ええ。だからあなたは私のものだ」

？？は？

「ちょっと、まってください、私は……っ！」

いいかけ、ここで身分をあかしていいものだろうかと躊躇した。この船はいつたいどういったおもむきの船なのか。

？？弘佐は呉越の太子？？跡継ぎで、いま呉越王たる父は倒れ伏せている。

だから父王の側に付き添っているはずの太子が街中にいるとは誰もおもわないし、ましてや薄汚れた衣服をまとって道に倒れているとは思うまい。

名乗ったところで信じてくれるかどうか。

とまどい黙っていると、ドカドカと強い足音が沈黙をさき、御簾があがる。

「おい、目が覚めたのか、晁衡??って、わっ！　なんで真昼なのにこんなに暗いんだ！　晁衡、お前、またなにか変な術をほどこしやがったな！」

白い影を伴ともなつてはいってきた男は部屋の闇を一瞬にして霧散させ、御簾から眩い陽射しがさし込む。

「まぶしい……」

弘佐が突然の白い光彩に目をおおい、怪訝につぶやくのを聞き止めた晁衡は日本語で入ってきた男を叱責した。

「怪我人を安静に寝かすために結界をはっておいたのに、よくも壊してくれたな」

「俺の船に変なものをはるなっ！」

男は晁衡に怒鳴って大股で部屋の中にはってくるなり弘佐の顔色を窺う。

「大丈夫か、傷は無いようだったから安心したが、何せ服がぼろぼろで血だらけだったからな、こちらで取り替えさせてもらった」

異国の言葉で男はいう。

何をいつているかわからないけれど、癖なのだろうか？　手振り

で説明してくれたのでなんとなくわかった。

男は陽に焼けて赤に近い褐色の肌をしており、茶が交じった髪を無造作むそうさくに後ろに束ねている。

服装といえば、粗末で袖がない衣？？隆々な腕が伺えた。

けれど、男は巨漢、というほどではなく均等がとれた体つきをして、背も高い。

弘佐を微笑ましく見つめるその瞳はつよく、形のよい唇は薄くて顎がしっかりした男らしい顔立ち。

二十五歳ぐらい、だろうか。

なんとなく顔が父にそっくりだ。

「あの、できれば中国語で話してくれませんか？」

ためしにそうお願いしてみると、あつ、と気づいたよう口許に手をやり苦笑した。

そして、

「お前は呉越国太子・銭弘佐、だろう？」

流暢な中国語で男は単刀直入にきりだした。

その言葉は銭塘の訛があつて、温かい。

けれど、それよりも弘佐の出生を言い当てたことにおどろいた。

「……たしかに私は呉越国王、銭元？が子……」

「弘佐！」

男は弘佐の言葉を最後まで聴かず強くだきしめた。

「ははっ、まさかこうやってお前に会えるなんて思わなかったぞ！」

荒く頭をなぜられたり、背中をたたかれたり。

弘佐は目をしろくろさせて戸惑う。

「あ、あの…あなたは一体？」

かろうじて、そう訊ねることができた。

その問いに男はハッと、目を瞬き弘佐の肩をつかんでひきはなし首をかしげた。

「覚えていないのか……？ フ、あたりまえだな。もう十年以上昔のことで、弘佐と弘宗はまだ物心もついていない幼子だったし、あちらでは俺のことを病死かなにかで片づけただろうからな？？改めて名乗ろう。俺は弘純<sup>ひろまこと</sup>」

「弘純……？」

弘純となる男はニツと悪童めいた笑みをうかべさらにいう。

「だが、本名は銭弘環<sup>せんこうかん</sup>。お前の、兄だ」

「……弘環…、兄上…！」

まさか、そんな。

しかし、その面影は父にとてもにている。

そして自分にもにていることがある。

弘佐は徐々に記憶がよみがえるのを知った。

いつも優しく頭をなげて、甘えると良く抱き上げてくれた兄を。

どうして私は弘環兄上のことを忘れていられたのだろう……。

切なくて愛しい想いが胸に沸き上がった。

2

「兄上は、行方不明になったということでしたが……生きておいでだったのですね」

「……ほう、行方不明」

「はい」

弘佐はこくりと頷く。

弘佐は六男、そして弘環は次男。

長く子供が生きながられないこの世とはいえど、弘環は夭折ではない『行方不明』だった。

父や、臣下たちは弘環の行方を手を尽くしてさがさせたが終ぞ生死を知る手掛かりはなかった。

「行方不明か……」

くりかえした兄の言葉は先とは違い憎々しげな様子だ。

「兄上？」

弘純はしばらく視線を床におとし黙っていたが、鼻で大きく息を吐くと胡座こゝした両膝に手をのせていった。

「俺は、王宮から連れ出されたんだ」

「え？」

弘佐は目を瞬き兄を見つめた。

「十二の時だった。ここにいたら殺されるから……と侍女に連れ出

されて……そのときはなにがなんだからなかった。頭の半分が眠りの中にあつたし、もしかしたら熱で朦朧としていたのかもしれない。気づいたら俺は小舟に乘せられていた。

島陰すらみえない、紺碧のただなかに。

小舟には、俺とこと切れた男だけがのっていた。

俺は怖かった。

なにかなんだかわからなかったし、あの時はまだ冬だったからよかったが、舟に積まれていた水も使いはたし、いずれ自分もこの男のように死ぬんだと大声で泣き狂い、疲れ果て諦めたときだった。あるの男に俺は拾われたんだ」

「ほう……」

興味深げに相槌をうつたのはいままでだまって弘佐たちのやりとりをみまもっていた晁衡が発したものだ。

一瞬、弘純は晁衡を睨にらみ付けた。

「その人は日本人だった。洋上にでて東海と杭州付近の島を探索するために船をだしていたようだった。俺は偶然その人に助けられて良くしてもらった。身分も出生も問わなかったし、日本の言葉や海での生きかたを教わった。

その人は日本の大貴族の傍流の方でな、表向きは地方官で海賊討伐を生業としていたんだが、昨年 本職 にもどった。瀬戸内海海賊の首魁にな」

「じゃあ、兄上はその人に仕えていたんですね。では兄上は海賊、なのですか？」

「……まあな」

そう答えた兄の表情はどこか暗い。

「ま、ここだと辛気臭いな。甲板にしよう。いいものをみせてやる」  
弘純は弘佐の手をとりたちあがって導いた。

「これが、海原！」

弘佐はただ青一色の世界に目がくぎつけになる。

紺碧の海、空高い青空。

水平線が空と海の境界線を描き、船体に打ちつける波はどこか心地よく穏やかだ。

西から吹きつける潮風がつよい。

海面にちらりと輝くものがみえた。

よく目をこらす間もなく、それは海面をけって弧を描き姿をあらわす。

イルカだ。

「どうだ、海は」

「すごい！ 杭州の港からながめているのとはわけが違う！」

弘佐は風にかきあげられる髪を押さえながら興奮して答える。

「だろう?」

この船は杭州の港で見かけるのと同じ物だけれど、添そうようにある船はどこが形がちがつて一回り小さい。だが船体が白く朱で縁を塗ってあつて鮮やかだ。

「この船が主船だな」

「へえ……」

朱にぬつた欄干にもたれて空を仰ぎ、弘純はつぶやくように訊いた。

「ところで、なんで王宮からぬけだしたんだ? 王宮にいれば会えることもなかったが、平和だったのではないのか?」

「……心配で」

「心配?」

「大火で民は家をなくしました。そんな彼らになにかしてあげたくて……でもなにもできなかった。あげくの果て殺されかけて……」

「海上のただなかにいる、か?」

「はい」

弘佐は苦笑した。

「私を助けてくれたのは香霄という金髪の少女でした、そういえば、香霄はこの船に乗船してますか?」

「いないな。その陰陽師……道士がお前を拾ったんだが……」

顎で彼を示し、晁衡は弘佐と眼があつて、やわらかに会釈する。

「あの、晁衡どの私のそばに金髪の少女はありましたか?」

「ああ。でもあれは人ではない。あなたを私にあずけると消えてし

まっ たよ」

「……そう、ですか」

弘佐はすこし落ち込んだ。

お礼をいいたかったし、もっと詳しく彼女のことを知りたかった。

「ところで、兄上たちはどうして杭州におらるのです？」

「ああ、それは??、」

「いうな、晁衡！」

怒鳴られ、晁衡は少し首をすくめて苦笑をつかべるだけにとどめた。

「まあ、いろいろだ…な」

弘純は息を吐くようにつぶやき、

「ま、これは天命なのかもしれないな、お前を助けろっ、ていう」

「え？」

「弘佐、お前は殺されかけたんだろう？」

「……はい」

誰に、とはいえない。

父に殺されかけたなんて。

それに真実どうかもわからない。民を尻目に贅沢をしていた父を許せないけれど、すべてを嫌いになれなかった。家族には優しくかったから。

だから今でも信じられない。

しかし、

「父王に…殺されかけたのではないのか」

「え……っ」

「……やっぱり、そうか。お前は素直だな。すぐ顔に出るぞ?」

苦笑して弘純は弘佐を見据えた。

「俺も、機会があつてどうして王宮からにげなくてはならなくなつたのかと、考えたんだ。侍女が父王に殺されるから逃げろといったが、恨みもないのになぜ殺されなければならなかったのだろう、と思ひ返してみた。

しかしどうもハッキリしなかったが、今わかった。弘佐のいうの少女が関係していると」

「え?」

「俺も、その少女をしっているんだ」

「…え、いつ、いつのことです?」

「十二の時だ父王の側にその娘がいて、それを父王に訊いたら一気に顔色が変わつたのがわかった。

豪胆な父王が恐るような怯えるようなそんな表情を浮かべたんだ。それから幾日もしないうちに俺は海に放りだされた……。お前はその娘のことを父王に訊いたことあるか?」

弘佐はうなずいた。

そう、私はみんなに 金木犀の精霊 についてきき歩いた。暗殺されそうにはなつた。

けれどその時点では香霄と出会つたばかりだったから父の意図いとは違つところに暗殺計画があつたのだらう。

「余計お前を国に返す気はなくなつたな」

弘純はつよく弘佐の両肩に手を置いた。

「このまま、海で生きろ。生きかたを教えてやる。国の面倒をみる

より自由だ。陸のくだらないしがらみにとらえられることはない」  
「できない」

弘佐は即答した。

「それは、できません。兄上」

「なぜだ」

怪訝に顔を覗き込み弘純はいう。

「大陸は混沌としている。華北は血で血を洗う戦が起きて、朝廷が入れ代わり立っては滅び、華南は国が連立し反目している。

呉越はそのうち周辺諸国にのみこまれて滅びるだろう。

だがお前までその運命に吞まれることはない。それに戻ってもお前は殺されるかもしれない。俺はそうとしてお前を返すことはできない」

「できないのです」

きつ、と兄をみつめる。

「私は、国を 楽園 にしたい」

「楽園？」

「そうです。たしかにこの世は乱世の直中にあります。呉越もいつ滅びるかわからない。けれど出来る限りのことをしたい。

民たちが心安らかに暮らせて平和で貧困もない、美しい国をつくりたい」

「弘佐」

「……幼い夢だと、笑いますか？ でもできなくはないでしょう？」

弘佐の瞳は真剣で揺るぎない。

「私は帰ります」

強い意志で、決然と言い切る。

弘純は、それを否、といいつづけることができなかったが。  
突然、くつくつと場違いな笑いが沈黙をさいた。

「ご立派な太子だ。もしかしかしたらあなたは、その手で夢を現実にできる力をもっているかもしれない」

「晁衡、お前まで……」

「だが、弘佐どの」

サツ……と、晁衡は両手を広げ、波の音が支配する青一色の世界を示した。

「今、あなたは海にいる。そして故郷を離れて我が国、日本国へ向かっている。もう戻れない」

「……それはっ」

「晁衡」

「あなた一人ではなにもできない、無力だ」

海に、捕らわれている。

いまいくら帰りたいと叫んでもきいてくれるものはこの船にはいない。

……無力だ、晁衡がいうとおり。

強い思いや意志がある。けれど一人そうおもっても周りがなにも動かなければ意味がない。

「でも私は帰りたい」

無力、だ。

けれど思いだけが強い。

情けなくて、涙があふれた。

しかしこれは国に帰って、父の後を継ぎ王になっても同じ事ではないのか？

自分ではこうしたい、と高々とさけんでも、協力してくれるものがないければ意味がないのかもしれない。

このように人を動かす力がなければ……臣たちは若い自分を侮る、きつと。

不安と絶望感が胸を塞ぎはじめた。

けれど、それでも諦めきれない。

「……弘佐、そんなに帰りたいか？」

「はい」

「また命を狙われるかもしれない、お前が思うような国がつかれなくとも、か？」

「はい」

弘純は目を閉じて大きく鼻でいきをつきいった。

「わかった、船をひきかえそう」

「兄上……？」

「お前は強いな」

「強い？」

「ああ、そして惹かれずにいられない。それに俺には弟を泣かす趣味はない」

くしゃり、と頭をやさしくなげ、弘純は船のものに命令する。杭州に戻ると。

「今は杭州とは逆風だが、なんとかなるだろう、なあ？ あの大火をも静める大陰陽師さんよ？」

「さあ、風の向きを変える術はしらんよ、」

無然と、そつぽを向いて晁衡は日本語で答え、そしてなにかを諦

あきらめたように大きく息をつく。弘佐に深々と頭をさげた。

「弘佐どの、失礼した」

「え？」

「あなたを日本に連れていこうとしたのは、理由があつた。それはとても個人的な思いからだつたが、同時に私はあなたの心をためた。本当に強いお心のお持ちだ」

「いえ……」

晁衡は「遠慮さなことはない」と、いい蒼天そうつをみあげた。

「日本国に連れて行くといったが、実をいうと弘純はしばらくは日本に戻れないのだ」

「戻れない？」

「日本も決して平和ではない」

晁衡は東海へと視線を向けた。

故郷をみつめる眼差しはどこか冷ややかだ。

「他国との戦いは日本では無縁だ、……いや無縁ではないがほぼ日本の朝廷が掌握している。だがそれに異議をとなえて兵をあげるものがいた。それが弘純の恩師、藤原純友。

彼はこの夏、乱を起こしたが捕らえられ首をはねられた。追捕つうぶは弘純をおっている。だからいま日本にかえれないのだ」

そこまでいって、につこりと優しい笑みをうかべた。

「……たとえ、一人では無力でも、協力してくれるものがいれば決して無力ではない。大きな力となる。……わかったか、弘佐どの」

「それと、私の力も少し、必要よ」

突如とわいたその声に弘佐と晁衡はおどろいて帆柱を仰ぎみる。

そこに、一人の少女が、香霄が仁王立ちで弘佐たちを見下ろして

いた。

「香霄！」

「おや、きたのか」

「きたのか、じゃないわよ！ たしかに私はあなたに弘佐をあずけたわ、けれどどこかに連れて行ってなんて、いつてないわよっ！ あんた、何か術をつかって私の目を誤魔化したわね、ゆるさないんだから」

「おや、私は社褖をおこらせてしまったな」

「他人事のようにいうんじゃないわよ！ にしても弘佐、無事でないよりだわ」

弘佐は香霄のどこか青ざめた表情を視て訊ねた。

「どこか、悪いのか？」

「あたりまえよ、国から離れてるんだから！

私は呉越の社褖よっ、社褖が土地をはなれるわけないところを無理してここまできたんだから！ …… あ、」

彼女はふらりとよろめいて、帆柱から滑り落ちた。

弘佐はあわてて香霄を受けとめる。

「大丈夫か？」

「ええ、ありがとう……弘佐」

無理に微笑んでいるのが弘佐にはわかった。

それに心なしか身体が透けて、香霄を支えているつもりでも、まるで紗のように重さを感じさせない。

本当に社褖なのだ、この少女は。

香霄は苦しく息をのみ、弘佐をみあげていう。

「あなたは無事に国にかえって、元？……あなたの父王とあって」

「父王に？」

「王になるために、」

香霄は弘佐の腕を支えにおきあがると、その勢いで再び空に舞う。そして、小さく呪文を唱えて風の向きを変えさせた。

帆が風をつよく受けとめ動き出す。

瞬間、大きく船体が揺らいた。

香霄は風をよび、杭州まで船を運ぶ考えだったのだろう。

しかし、

「うわあ！」

突然の揺れに弘佐は耐えられなくて船縁につかまることもできずに、勢いのまま蒼海に投げ出された。

「弘佐！」

海面に落ちる瞬間まで弘佐は恐怖より、悲しみに似た不安に支配されていた。

香霄が消えてしまう。

そんな不安に。

弘佐の瞳は最後まで香霄をとらえる。

海面に弘佐が落ちたことを知った香霄の青ざめた顔を。

### 第三章・因果

1

海面に強く身体を打ち付けられ、ゴボゴボ…と、泡をあげながら弘佐は沈んでいく。

青い世界、天上は光を反射し乱舞する。

水を飲み息ができなくて苦しかったが、その美しいきらめきに目を奪われた。

刹那、天上のきらめきが鏡より鮮明に一つの光景を映し出す。

天に届くほどの大樹<sup>そう</sup>。

大地に力強く根がぐねり広がり、空を見上げれば太い幹や幾千<sup>いくせん</sup>の枝の格子。

緑々とした葉が太陽の光に輪郭をなぞられて金糸の刺繍のようだ。

「おーい、そこの胡娘<sup>クニヤン</sup>！」

少年がその空に声をかける。

見上げる幹に一人の少女が天上を仰いで寝そべっているのを発見したからだ。

幹は人を十分に支えるほどの太さだが、そこにたどりつくことはできないし、枝は人の身長をゆうに超していて、足場がなく登ることは無理だからだ。

少女はよばれて、緩慢<sup>かんまん</sup>に上体をおこし少年を見下ろす。

金髪碧眼の少女……香霄だ。

香霄は少年を見定めるようにジッとみつめ、次第、形のいい唇が笑みを刻む。

「おりられないのか？」

「私はこの土地の社稷<sup>しやく</sup>・香霄！ そなたか、私を長き眠りから目覚めさせたのは！」

香霄は、ひらり……、と優雅に少年の前に舞い降りた。

「ハ……？ 社稷……？」

少年はポカン、と口をあけて呆気にとられる。

「そなた、名は？」

「鏐……銭鏐<sup>せんじゅう</sup>」

「鏐、そなた、願いはあるか？ 私が叶えてやろう」

「いきなり、願いつていわれてもな……」

銭鏐はうーんと、考え

ひとこと。

「ない」

悪童めいた笑顔でいった。  
その答えに香霄は目を瞬く。

「願い、というのは神に叶えてもらうものじゃない、というのが俺の考えだ。人はなにかしら努力して希望や願望を現実にして手にするんじゃないのか？」

……そりゃ、人には無理な願いってのもあるかもしれねえが、俺にはそんな願いはいまのところないな」

「じゃあ、私は鏐の願いが決まるまでそばにいる」

海面はキラキラと輝きを帯びていろいろな場面ときを映し出し、弘佐に見せる。

鏐と香霄の出逢いから、時はうつろい…戦や、皇帝に謁見する鏐の姿が映し出される。

そのかたわらにはいつも香霄が付き添っている。  
ただそばに。

ついに鏐の臨終を映し出した。

鏐は自分の死後のことを皆に託し終えると、香霄を呼び願った。

真に民が安らげる国を創りたい、と。

香霄は悔しげに目を伏せいう。

「できない…、あなたはすでに『長寿』を私に願ったもの。

でも私はこの国の王の願いを叶えることはできる。そのためには契約しなくてはな

らない。簡単よ。元？<sup>げんかん</sup>に王の宣下<sup>せんげ</sup>をなせばいいだけ」

その答えをわかっていたように、銭鏐は口元に微笑を浮かべて息子を呼んだ。

「父王……」

元？はその時を待っていたようだった。

声は涙にうるんで詰まりぎみだが、瞳には悲しみではなく、嬉々とした輝きがあった。

「お前にこの国を任す、国を良き道に……」

鈴がついた丸い枕。

警枕けいちんが高い鈴の音を立てて転がった。

その警枕の音をききとめ、熟睡することはなかった不睡竜・銭鏐は最期にその音を耳にして永久の眠りへと落ちていった。

同時に弘佐の視界も暗幕がゆっくりと落ち、闇につつまれ？？。

2

「おい！ 弘佐、しっかりしろ！」

怒鳴り声と、強く頬を打つ痛みに弘佐は目を覚ました。

心配そうにのぞき込む弘純を確かめる間もなく、胃からこみ上げてくる水を吐いて

弘佐は身をよじり海水を全部吐き、やっと苦しみから解放されると、意識がハッキリしてくる。

「ここは……」

甲板の上だ。たしか海に投げ出されて……。

じゃあ、あれは夢……？

弘純は弘佐の背を労るようにさする。

「大丈夫か？ それにしても、海に投げ出される奴があるか、血の気が引いたぞ」

弘純は全身びしょぬれだった。

海におちた自分を助けてくれたと知って謝った。

「申し訳ありません、兄上」

「申し訳ないで済むか！ 運が悪ければ死んでいたんだぞ！ わっているのかっ！」

「まあ、まあ……しかるなら、社稷に文句を言え。あれは不可抗力だ。何人かなげだされたものだっているはずだ」

横から晁衡がなだめ苦笑する。

「それに弘純どのも投げ出されたくせに……」

「ちがう！ 弘佐が落ちたのを知って助けたんだ！」

「そういうことにしておこう」

嗤い、さらりと聞き流す。

「そういえば、香霄は？」

弘佐はハッとあたりを見渡す。けれど姿が見あたらない。

あのと彼女が疲れて、立っているのもやっとの様子だった。

そして力をふりしぼるように風を呼んだ。

「まさか……香霄は」

「そう心配しなくてもいい。社稷は力を取り戻すためにどこかにある廟に、もどったのだろう？」

弘佐の心情きもちをしってか晁衡は告げる。

「廟、に……」

「それより社稷のおかげでもうすぐで陸がみえてくる」  
弘佐は、上体を起こして故郷をみつめた。

杭州。

陸をみて安堵と、そしてなぜか不安がこみ上げた。  
あの海面が映し出した不思議な光景。

あれは夢だったのだろうか？

違う、夢じゃない。

香霄は呉越の社稷かみで、銭鏐の願いを叶えるために側いた。  
これからも彼女は呉越王となる者の願いを叶えるために傍にいてくれるかもしれない。

鼓動が耳をうち、弘佐はハッと胸元をつかむ。

どうして、こんなに胸が高鳴る？

香霄が神で願いを叶えてくれる存在だと知つたと同時に……。

「弘佐どの」

肩に晁衡の手が置かれて、ハッと彼を振り返る。

晁衡のその顔は真剣で思わず息を飲む。

「あなたは神の助けがあつて再び大陸に戻る。それは定められた天命かもしれない。

しかしこの先、なにがあつても、香霄に願いを告げてはいけない。自分の心のなかにとどめておきなさい」

「それはどういう意味ですか？」

「あれは代償を求めるものだ、」

「代償を？」

「神が無償で何かをかなえろとお思いか？  
自分の力でなし得ず、神にかなえて貰った願いにはかならず、  
大きな代償 がともなうという」

その言葉に鼓動が静まるのを知った。

（そうか、何を叶えてもらおうと期待したから、か）

そうだ、自分の願望は己の手でつかみ取るもの。

香霄に叶えてもらうものじゃない。

（本当の願いは心の中に）

弘佐はその言葉を強く胸に刻んだ。

「兄上！」

弘宗は兄の帰還をしり、太医や侍従の静止を無視して弘佐のもとに駆けつけた。

身体は動くだけで鈍い痛みが襲い繰る。

けれど、弘佐の姿を<sup>あに</sup>目にとめて痛みなど消え去った。

弘宗は突然駆けだした弘佐の姿を一生懸命に追った。

「兄上、待ってください、??！」

けれど兄が横合いから伸びた腕にとらえられたのを目撃し青ざめ、同時に鈍い痛みが腹部に走った。

人にぶつかった時、ヒ首を刺された。

「兄…上」

激痛に倒れて、闇に沈む視界がふたたび光をとらえたのはそれから丸一日。

かすむ視界が高い天井を映し、そして心配そうにのぞき込む、母と一歳年下の弟・弘俣??文徳の顔をとらえる。

しばらく意識が朦朧とし、状況がわからなくて、順を追って記憶を辿り、行き着いたのは兄の行方。

「兄上は！」

叫ぶように訊ねると、母は弘佐の行方を捜させていると告げた。しかし、母は弘佐を邪魔な存在だとおもっている。

たった二、三ヶ月しか違わぬのに自分が生んだ息子が太子にはなれないと言うことで。

弘宗は弘佐をとて敬愛して慕っている。  
兄を悪く言うものは例え母でも許さない。

もしかしたら弘佐の行方を捜し、見つけ次第、殺すつもりだろうか？

まさか、と思うが内心、気が気ではなく兄が無事であるように……  
としか祈れない自分が悔しかった。

そして弘佐が行方をくらませて数日。  
その間、父王の体調が悪化した。

いままで熱にうなされながらも意識をたもっていた父王は呼んでも気づかなくなった。

王が危篤で、その上、太子が行方不明。

このまま王が倒れ、弘佐の行方が終ぞ捜し出せなかつたら、弘宗が呉越王を嗣ぐことになる。

「兄上……、どうかご無事で」

そう強く祈らない日はない。

自分の夢は、兄を支え民が安らげる国とともに創ること。

兄上なしでは私の夢もない。

明確な構想と熱い思いを持つ兄を補佐することこそ自分の描く道。

「兄上、ご無事で」

なんと口を吐いたかわからない祈りを呟いたとき、

「隆道兄上！」

突然、弘俣があわてて室にはいつてきた。

「文徳、なにをそうあわてて、まさか兄上が！」

弘俣は「はい、」と涙をうかべてうなずき、

「いまお戻りになって！ ともの者も一緒に！」

ともの者、というのが気になるが、とにかく兄が無事に帰ってきたことに安堵し、じわりと心がしびれ、涙になってあふれるのを、拳でぬぐって寝台から身体を起こした。

弘俣は弘宗に肩をかして、ともに弘佐を迎えに行く。

背後で「どうか安静に！」という声がかかったが、兄を思う弟たちはその声を無視し急いだ。

「痛みますか、隆道兄上？」

身をかめるようにして歩く弘？を心配して弘俣は訊ねる。

ニツ、と弘宗は笑う。

「大丈夫だ、文徳。たいした傷ではない。それに兄上を心配させたくないから……」

「ではせめて袍を羽織ってくるべきでしたね。襦ねまきのままで示しがつきませんよ。

でもすこしは玄佑兄上にも心配をさせるべきです。ぼくは隆道兄上がどんなに玄佑兄上を心配なさっていたか……みてきてつらかったんですから」

「そうだな」

くすりと苦笑し、引っかかっていた言葉をおもいだす。

「文徳、ともの者、とはどういうことだ？」

「え？ 玄佑兄上の側近のものでしょうか？」

「？」

弘宗は首をかしげた。

なおさらわけが解らない。

弘佐はひとり『さらわれた』のだ。

供を連れて行けたはずがない。

（兄上と親しい近衛が探し出したというわけか？）

4

「兄上！」

「隆道、文徳！」

臣下たちに囲まれる弘佐は弟たちに呼ばれて、振り返りふたりの元に向けた。

「すまない、心配をかけたな。隆道は刺されたときいたが、大事な何か？」

「ええ、経過は良いそうです。それに私は兄上が無事ならそれでいいのです」

瞳を潤るませて弘宗はいい、ハッ、と弘佐をうかがう。

「兄上は？ どこか怪我とかしておりませんか？ あ…、ただ服装がかわっているだけですな？」

「これか？」

弘佐はきている服『狩衣』をつまむ。

弘佐がいま身につけているのは日本の服装だ。

晁衡が着ているのと同じもの。  
ちゃんとした服も用意されていたが、晁衡が着ているものが珍しくて少し着てみたかった。

（めったに着られるものでもなさそうだったから）

ただし、ここに来てからは念のために袍をはおってきてきたが。

「おい、兄弟感動の再会がいいが、弘佐、はやく着替えて父王とあったほうがいいんじゃないか？」

突然頭上から太く透る声が落ちてきて弘？と弘俣はハッとし、  
「兄上に対してなんと無礼な……」

しかし弘宗は言葉をつぐことができなくなった。

袍服をまとい、髪を無造作に巾に包んでいる長身で若い男は父王にそっくりだったからだ。

「久しぶりだな、二人とも」

悪童めいた笑みを浮かべる弘純。  
その背後には異国の男も苦笑をうかべている？？晁衡だ。

じつは晁衡が 大規模な術 をかけてあやしまれることなく宮城内部に潜入できるようにしたのだ。

「あなたは……？」

呆然とする弟二人に、兄二人は苦笑を禁じ得ない。

「このかたは弘環兄上だ」

「こ、弘環兄上！」

弘宗は予想通り驚愕をうかべたが、弘俣は不思議そうに首をかしげているだけだった。

むりもない、弘俣はまだものの心のつかない赤ん坊だったのだから。

5

「これも御仏の導きなのでしょう」

弘宗は、弘佐と弘純がどのように出逢ったのか説明をうけて、複雑な表情でしみじみ頷いた。

説明といっても香霄のことをうまく省いて話したが？？しかし、この話だけでは疑い深い弘宗は信じないと弘純はおもって今まで持てあまして売ってしまおうとも思ったが、なぜか手放せなかった印綬をふたりに示した。

それでなんとか信じてはもらえたが。

「大兄上はどうして王宮に？　？？まさか王位を狙って？」

弘純は鼻でわらって、荒く弘宗の頭をなぞていう。

「ああ、心配しなくともいい。俺は行方不明になって死んだことになってるだろうし、いまさら陸で暮らそうとはおもってない。ましてや王位なんて。？？ただ、どうして父王が、俺を殺そうとしたのかを正確なところを知りたくて……」

そこで、ハツと口を押さえる。

口をすべらせてしまった。

弘宗はその言葉の意味を聴くとらえて大きく目を瞠る。

「殺そうした？　父王が大兄上を殺そうとなさったのですか！では今回の一件、玄佑兄上を殺そうとしたのも……、父王……」

「隆道、文徳。私はこれから弘純兄上を伴って父王のもとに行く。心配をかけてしまったし、父王も大火のあと私の行方がしれなく

なつて気が氣じゃなかったかもしれない、お心にご負担をかけたとおもう」

「兄上、父王は兄上を亡き者にしようとなさったんですよ、どうしてそう善意的にとることができるんですか！」

弘宗は弘佐の肩を掴んで行かせまいとするが、弘佐は優しくその手をはずす。

「行かなくてはいけないんだ。国を『嗣ぐ』ために」

「兄上……」

弘佐は颯爽と回廊をいく。

父のもとにつながる回廊を。

どこからか風が吹き、優しく元権の頬をなぜた。

訣別だというように。名残欲しく。

それと同時に、侍従が弘佐の訪れを告げた。

「弘佐……か、」

元権は皆に下がるようにいい、弘佐と二人だけにしよう命じる。

弘佐は死ななかった。

ならばここで己の天命が尽きる。

（父と同じように息子に王の宣下すれば終わる）

終わるが……。

「父王、ご心配をおかけして申し訳ございません」

「いいや、お前さえ無事ならそれでいい……」

重く、思っ通りに動かない手をあげて息子の頬にあてる。

しらじらしい、と思うも、本当の気持ちだ。

なぜかホツとしている。

弘佐はハッと、目を睜り、手に手をそえて、つよく頬に押しつけた。

父子の情が温かい、胸を切なく苦しくさせたがしばらくして、弘佐はゆっくりと手を戻し告げる。

「父王に紹介したき者がございます」

弘佐の数歩後れて膝をつく者をしめす。

「我が兄、弘環です」

元権はその名を耳にして目を大きくみはり、青年を凝視する。  
かすれる視界に若かりし頃の自分がいた。

「まさ、か」

「……お久しぶりです、父王。この弘環、そして弘佐もあなたの暗殺の手を逃れて無事に生きて戻りました」

タンとした、抑揚のない強い声がそう告げる。怒りを抑えた声音こわねだ。

「どうしてお前が、ここに？」

「どうして？ それは私のセリフです父王、どうして私たちを殺そうとしたのか」

元？は怪訝に眉をしかめるが、あきらめたように一つ大きなため

息を吐く。

「死にたくなかったからだ」

「どういうことですか？」

「お前たちは……香霄を見た。彼女はこの国の王を選ぶ社稷だ。彼女が見える者はこの国の王となる。」

私は怖かった、香霄が他の者に見えるのが……私が香霄を見えるようになって父王は数年のうちに死んだ。

しかし私は死にたくはない、だから視えるものを殺すのが一番だと考えた。さすれば私はずっと王でいられる」

「ただ、そのためにっ！ あなたは息子をも殺せるのか！」

弘純は怒りにかられ父王の胸ぐらをつかもうと手を伸ばすが、弘佐がその手を包みこむように押さえ込む。

「父王はもう、私たちを瞳に映していない」

「え？」

弘純は父の瞳をハツとしてみつめる。

死の淵をさまよう顔は血の気がなく、虚空を映す瞳はうつろ。ただ動くのは想いを告げる唇だけだ。

「けれど、違った。香霄が次の王を選ぶから死ぬのではない。社稷に『願った』から予は死ぬのだ」

「香霄に願ったから、死ぬ？」

弘佐はどきりとして訊いた。

脳裏に晁衡の言葉を思い出したからだ。

『神が無償で何かをかなえろとお思いか？ 自分の力でなし得ず、神にかなえて貰った願いにはかならず、大きな代償がともなうということだ』

（父王は香霄に願ったから死に逝くのか？）

願いの代償として。

弘佐は固唾をのんで、訊いた。

「父王は、香霄になにを望んだのですか？」

「……、変えたいと」

こころなしか、元権の青い唇がほころんだ。

「欲望を打ち消したいと。」

結果、大火がおきて、栄華を極めた宮殿が燃えた……」

民を顧みず、自分の欲望をもとめ、建てたあの壮麗な宮殿を、都を。

？？しかし、その根本にあるのは、もっと違う願いでささやかなものだったか。

「じゃあ、あの大火は父王が願った結果だったのか……」

弘佐の声は怒りに震えていた。

だかもう顔は見えない。

「弘佐よ、もう、予はつかれた……」

元？は何もうつさない目をとじ、大きく息を吸う。

先王の臨終しうきゆうの時を思い出す。

あるとき、元権は先王の死を心待ちにしていた。

父に付き従い、乱世をかけぬて国を築いた？？英傑が死ぬのは悲

しかつたが、しかし臨終の際は泣きはしなかったのだ。

むしろ、父が長年築いたものが簡単に手にはいるとおもつと嬉しかった。

父の側にいつも付き添っていた女神が手にはいるのだとおもつと。

この息子はどのような顔をして自分をみているのだろうか？

香霄のことはすでに知っているはずだ。

弘佐も香霄を望むときがくるのだろうか？

それが 望み となるのだろうか。

「父王は、愚かだ」

そのつぶやきとともに熱い涙が元？の頬におちた。

元権は口元に笑みを刻み宣下した。

「銭弘佐、お前に国を託す」

元権は金木犀の香りを乗せた心地よい風を感じながら逝った。

6

「俺は、別に父王の死を看取るためではなくて、弘佐の護衛をかねてつきそったつもりだったんだがな……抜け目のない父だから最期に何かあると踏んでいたのに、でも最期は親子の情……やっぱり最期までなにを考えているかわからなかった」

弘純は満月をみつめながら、そばにいる晁衡に告げた。

彼は杯に月を映しつつ「そうか」と頷く。

晁衡と弘純は王宮の院庭にわが望める一室を一時貸してもらっていた。

?? 中秋の満月、そして咲き誇る金木犀の花。

遠くとどろくは、銭塘江の満ち潮が激しくぶつかり合う音だ。

海上で満月を望むのも、日本のススキ野原でこぼれ落ちるような月を愛でるのも捨てがたいが、この風情はなかなか味わえないだろう。

「俺は……一度死んだと、思っていた」

あの蒼海のただなかに。

?? そして藤原純友に拾われた時点で自分は日本人に生まれ変わったのだと、おもっていた。

けれど、ここに帰ってきて死んだはずの自分がまだ生きていることをしった。

父を憎いと思う気持ち、大切な兄弟を思う気持ち、そして国が好きだと思う気持ち、様々に掘り返される。

「父王は愚かだと、弘佐は言った。ほんとうに愚かだ。大火を起こさずとも心を入れ替えて、自分のためではなく民のために尽力すればよかったんだ。?? 弘佐に託されたのは焦土と化した都と狡猾な官吏ども、楽園どころか地獄だ」

ぐい、と杯をあける。

「願えばいいではないか、香雪に。楽園を創りたいから少し、手がかしてくれと」

「願えば弘佐は死ぬ」

「じゃあ、言い方をかえればいいのだ、頼んでいると」

「同じことだろう、本当に口が減らないな、はるあき 晴明よ」

晁衡は、フツ、と口元を綻ばせた。

そして窺うように弘純に訊ねる。

「しかし、いいのか。明日、弟たちに内緒でこの国を出るんだろう。日本にお前の居場所はない」

「だれが日本に帰るといった？ 他国を見て歩くんだよ。……まあ朝廷が大陸にほんここまで追補派遣するとはまず考えられんが、……巨海にすることは禁忌だからな」

「見聞と称して弘佐どのに他国の状況をおしえてやろうという魂胆だな？」

弘純は笑った。

「俺にできるのはこのぐらいだ。それにそう簡単にお前を日本に帰さない。道連れだ」

「願ったりかなったりだな」

晁衡……あへのはるあき 安倍晴明にとって日本はつまらないところだった。

貴族は繁栄を謳歌し、しかし反面、心の闇に怯えている。

民は貴族の際限のない搾取に餓えて拓く力を見いだせず死んでいくというのに。

恵まれた者ほど未来を拓こうとしないで、自分の心が生んだ闇やみに怯えて。

晴明は生まれつき人の生き死にを知ることができた。

だから、見たことを話せば、安堵したり怯えたり、絶望したり…  
…そしてどうしたらいいとすがりつく。

その手が重くて痛い、何とかしてくれと、運命を託されたようで。

「自分で考えろ！」と、晴明は叫び、それらの手をはらった。

運命は自分の行いでかわるモノなのだから。

（どこか、遠くに、そう大陸に渡ろう。そうもつと広大な世界をみてみたい）

しかし思っているだけでは貴族となんらかわりようがない。

ならば行動あるのみ。

だから、あの乱？弘純が重傷を負ったとき、助けてやったのだ。  
この者はきつと、自分を狭きところからだしてくれと確信して。

しかし、長い旅になりそうだ。

これもまた運命なのだろう。

晴明はこぼれ落ちそうな輝きを放つ満月を見つめ、つと和歌を口ずさむ。

「あまのはら　ふりさけみれば　春日なる、三笠の山にいでし月かも、か……」

通り名でつかっている『晁衡』は、遣唐使として大陸にわたり終ぞ日本に帰ってこれなかった安倍仲麻呂あへのなかまろの中国名だ。

その名を自分が名乗っているのも気まぐれではないきがした。

### 第三章・因果（後書き）

ご指摘分直しました！ ありがとうございます！

## 第四章・即位

1

——天福六年、錢元權、卒し、錢弘佐立つ。

まだ十五にもならない少年王の誕生だった。

「ふう、……まずやらなくてはならないことが山ほどありますよ」

弘宗は国の状況書類の束を弘佐の机においた。

やり遂げなくてはならない問題がまさに山のように。

積み重なるほどある。書類を一枚手にとり、

「まず、大火の後始末と、佞臣ねいしんの肅正、猾吏かつりの一斉検挙、税の削減  
……」

たんたんと読み上げる弘宗の声が、怪訝をおびる。

「とくに、先王のもとで贅をこやしていた重臣の杜昭達としやうたつ、章徳安しやうとくあん、  
李文慶りぶんけいたちをどうにかしないと国が立ちゆきません。小者ではあります。それが、国庫を食い荒らすものでございます。それに彼らは兄上が  
まだ幼主だとみてあなどっている様子です」

弘佐は苦笑をうかべ、けれど瞳は真剣な色が浮かんでいる。

「前途多難か……、だがこれを使い切らねば、私たちが望む国は  
作れない。私たちはまだ若い。時間はあるが、だからと行って先送

りはできない。迅速かつ着実に対処していかなくてはな

「そうですね」

弘宗は強く微笑んだ。

自分たちを子供だと侮る者が内外に多いが、大人たちの凝り固まった考えでは発想もつかないことも柔軟に考えられる。若さが最大の武器だ。

弘宗は、その言葉に笑みを唇に刻み、ふと、重要なことを思い出した。

「あと、兄上を攫ったものがわかりました」

「だれだ？」

「杜昭達です。本当は私の母が犯人だとふんだのですが、違いました」

「なぜ、義母上だと？」

「幼いとき兄上を殺すよう命じたのは私の母だったからです。事なきをえましたから黙っていました。だからまた母の仕業かとおもい問い質したのです。」

でも違いました。母は『お前は心より敬愛する兄を支えるのが向いているのですね』とあきらめ半分で呟いてました——父王が亡くなり気落ちしているようでした…。」

「そうか……私の母もだ」

父を嫌いになれないのは、家族に優しかったからだ。

とくに自分の妻妾たちには事細やかだった。

（しかし、自分のために息子の命もうばう冷酷で愚かな部分もあった）

けれど、『ためらい』があつたと思いたい。あの時、父子の情

を感じたのだから……。

しんみりした空気が漂ったが、弘宗が話をもどして苦笑をうかべる。

「それにしても大兄上たちがいてくれたら少々違ったかもしれない。特に晁衡どの。彼は欲しい人材ですよ、実に」「たしかに」

弘佐もくすりとわらった。弘純と晁衡は新王即位のごたごたにまぎれて呉越をでていつてしまった。

どこへ行ったのかも教えてくれなくて、寂しく思ったが、彼らが使用していた室の卓の上には置き手紙と、弘佐が晁衡に頼んでいたものがおいてあった。

手紙には、

すこし他国を見て歩く。

応援しているから、お前の望む国を俺たちにもしつかりみせてくれ。

と。

兄上たちも陰ながら応援してくれる。

弘佐にとってそれが嬉しく、心の支えになった。

(必ず)

弘佐は弘純たちにむけて、心の中でつよく誓う。

そしてその手紙の上にあったものは今、弘佐のふところの中にある。

けれどそれを渡したい人がまだ弘佐の前にあらわれていないから渡せないでいるのだけれど。

香霄 一体どこに……。

船の一件以来、一度も姿をみていない。  
季節はもう冬を迎えようとしているのに。

あの契約は父の代までだったのか？

玉牡丹より、よいものを香霄にあげると約束したのに。

そのとき。

弘佐はただよってきた金木犀のあまい香りに、ハッと顔をあげる。

視線の先には、金髪碧眼の少女が空に浮いて微笑んでいた。

声を上げそうになった弘佐に、血色の良い唇に人差し指をあてて

「しずかにね」と合図をおくり片目を瞑った。

2

濃紺色の空に星々が流れきらめき、夜風がさやさやとわたる深夜。

弘佐は中庭に、新たに植えた金木犀のそばに腰をおろし、空高くあがる下弦の月をみあげながら、訊く。

「私は王になった。」

香霄は、私が王になること、前からしっていたのか？」

「ええ。でも強いて言えば直感かしら？ 私もよくわからないのよ

ね。——もう知っているだろうけど、私は金木犀の精霊じゃない。  
この国の社稷なのよ」

「社稷、か」

「昔約束したのおぼえている？」

「忘れるはずない」

「ならよかった。あのあと少しあなたの記憶を消したの」

「どうして、そんなことをする必要があつたんだ？」

「……元灌が嫉妬するから」

「嫉妬？」

「彼は、私が自分にしか見えないことが誇りだったのよ。そのため、  
あなたの兄さん、弘純は国を追われてしまった、」

「そうか、だから、大火のとき香霄にあつてもよく思い出せなかつ  
たんだ。……なんだか情けないな」

「でも思い出してくれただけでいいわ」

香霄はくす、と小さく笑う。

「……——香霄にとってお祖父様や、父王はよい王だっただろうか  
？」

「……むずかしい、質問ね。答えて弘佐のためになるのかしら？」

「父王みたいなことはしたくないから」

香霄は弘佐の瞳に怯える微かな光を見つけた。

弘佐は気丈に振る舞っているが王として国を治めるのに不安がある  
のだろう。

「前の王なんて気にせず、弘佐は弘佐の思う国を創ればいい——私  
はそばにいて王の願いを叶えるのだから、それが香霄という社稷の

役目……」

風に弄ばれる髪を耳の後ろでおさえつつ、弘佐に訊く。

「弘佐は、この国をどうしたい？」

——いいえ、あなた自身どうしたいの？

国の領土をひろげて天下を手に入れたい？　どんな願いでも私が叶えてあげる、国のためであるなら無償でね」

弘佐はしっかりと香霄の瞳をみつめていった。

「……私は国を　楽園　にしたい」

「楽園？」

香霄は首を傾げた。

「餓えのない、みんなが笑って心穏やかでいられる国……前から描いていたけれど、

大火に見舞われた街をみて自分が創りたい国が形を帯びて、いま明確にある」

一時のものより永久なるものを。

「楽園とよばれる国を創りたい」

「それが弘佐の願いなの？」

「でもこれは香霄に願うものじゃない。

この手で叶えるものなんだ。国が豊かになるのも疲弊するの<sup>い</sup>も為政者<sup>せいしや</sup>の政治手腕の問題だろう？

神に、どうにかしてくれっ！　と祈るより自分の手で自分の強い

意志でなるもだと私は思うんだ。実際にそうだろうか？」

「じゃあ、他の願い事はないの？」

「ひみつ」

弘佐はにつこりと人差し指を唇にあてていった。弘佐には珍しい悪童めいた笑み。

それをみて香霄は息を飲む。

銭鏐との血のつながりを感じたから。

「まったく、弘佐の頑固さって鏐なみね！」

香霄はぶう、と頬を膨らませた。

「そうだろうか？」

「そうよ、なら私はあなたの願いが決まるまで側にいる」

弘佐はあごに拳をおいて笑った。

そして懷にしまっていたものを取り出して香霄の髪に挿した。

「これは？」

それは玉でできた金木犀の簪。

金木犀の花汁に浸したもので漆で飴色にそめて良い香りが漂う。

小花の中央には真珠がはめてある。

「約束しただろう？ もっと良い物をあげるって」

「あ……」

香霄はハッと口に手をやり息を飲む。

「晁衡どのにすこし細工をしてもらって、香霄だけのものにしてもらった。もう他の人に取られることはないとおもっ」

「本当！」

そのとき、香霄は年相応の少女のようにはしゃぎ、そして池の水鏡をのぞいて髪に挿してはぬいたりしてどこがいかたしかめる。

「——こんなに喜んでくれるとはおもわなかった……」

心がホツとして、じわりと幸せが広がる。

「とても大切にするね、弘佐？？ありがとう」

香霄は弘佐の頬に軽いキスをした。

弘佐は目をしばたたき、とたん、顔が熱くなる。

香霄が側にいてくれる。

（それが私の真の願い）

叶って、といってるといってもいいのかもしれない。

でもそれは密かな願いなのだ。

密かで大切な……。

翌年、天福七年、弘佐は国庫を貪ぼる佞臣を誅し、弟・弘宗を丞相に任命した。

大火の立て直しに努め、国は良き方へと向かいはじめ。

## 断章・月のこぼれ落ちる泪（前書き）

断章です。周瑜の娘のあの人登場します。

## 断章・月のこぼれ落ちる泪

——手のひらから滑りおちた過去が夢となって戻ってくる。  
とても切なくて、切なくて——。

そして大切な記憶。

1

白い花が咲き誇ほこる草原——空には大きな満月。  
甘い香りと夜気が幻想へと導くその風贅、ざわざわ、ざわざわと  
草木が子守歌を奏でる。

——その白い花は茉莉花という。

遠い先祖が、大陸の東の最果までに持ち込んだ花。

「月の女神が、私たちを見守ってください」  
母が優しく、ふつくらとした手で香霄の額を撫なでて昔話を語っ  
てくれる。

——遠い昔、月の女神だったご先祖さまは戦を嫌い東の国へ旅立  
ちました——。

幾多の困難を乗り越えてこの地に、小さな邑<sup>むら</sup>を築きづいた女神は  
その後、月の宮殿へと帰っていききました。

その裔が私たち花月の一族。

東の大陸には珍しい、白い肌と金の髪を有す。瞳は青い空を映したような色。

住処とするは、琥珀の小石が敷きしめる小川沿い——泉をたたえる森深く。

一種、界外と離れた場所に暮らし、自然と共存することを旨としている。

外界、邑の外にすることは禁忌——中華（大陸）は乱世のただ中にあるからだ。

いくつもの国が血で血を洗う戦をしている。

戦で死んでいった者の血の臭いは、花月族にとって毒だった。領有土地からであればその邪気に病にかかってしまう。

「……いまでも、外は戦？」

香霄は母にそうたずねた。

その声は、戦は怖いもの、あつてはならぬもの、と長老に教えられたからだ。

戦による悲しい話もたくさんきいて、そのことを思うと心が張り裂さる痛みが襲う。

早くに夫を亡くした母は、まだ若く邑でも指折りの美女。

長身で、背に波打つ髪はなぜが金色ではなく、銀。

輝く月光の色を髪に閉じこめた香霄とは違い、母は冴え冴えとした色を髪に閉じこめていた。

「そうね、まだ…戦は続くでしょう」

「悲しいことが…たくさん？」

「ええ、それでも戦はやまないわ。戦を嫌い、国を平和にしたいと思う、本当に強い意志をもつものが現れば平和になるとおもうのだけれど……」

香霄は小首をかしげた。

「なんで、そう思わないんだろう？ 平和がいちばんだって」

母は複雑にわらった。

悲しみや恨み、憎しみが戦の渦となり消えることはないということを理解するには早すぎる。

「おやすみなさい、香霄」

母は香霄を腕の中に抱きしめる。

その腕の中にいれば怖いこともなく、安らぎにつつまれて眠ることができる。

香霄は安堵のうちに寝息を立て始めた。

翌日も、香霄は元気に邑を駆けまわる。

同じ年ぐらいの子供達と遊び、また年下の子供の面倒もよく見るお姉さんとして。

そんな少女を村の人々は微笑しく見守る。

「今日も元気だねえ、香霄は」

「そうさな、あの子が元気に駆け回まわっているだけで、私たち

も元気になる。あと数年すれば美女になるかもしれないなあ。その時はうちの嫁にきてほしい」

うんうん、と頷く夫に妻が怪訝に眉を顰めて首を横に振る。

「なにいつてるんだね、あの子は巫女になる運命だと忘れたのかい？」

「そうだった、」

ハッと、口を押さえる夫に対し、妻は大きなため息をつき、憂いを帯びた瞳で香霄を見やる。

「長老も酷なことをおっしゃる、香霄が女神の申し子なんて……」

『いずれ、この子は神となるだろう、』

香霄の母親である月遥が、生まれた娘を長老にみせたとき、そう告げられたそうだ。

十六歳になったら邑の巫女にさせると。

巫女になれば、結婚はおろか恋愛もできない。生涯を、邑の平和のために祈り続けなくてはならないのだ。

しかし、少女は自分が巫女になるとまだ知らない。いや、だれも香霄に教えてはいなかった。

「香霄は、受け入れるだろうか……」

子供たちと香霄の声が邑にこだまする、それは大人たちにとってどこか切なくさせた。

再び時は流れて、運命が動き出す。

「楠葉、どうしたの？」

突然、足下でじゃれていた銀狐ぎんこが何かに反応してダツ、と琥珀の泉を抜け外界へ繋がる道を駆けていくのに香霄は驚いた。

「——ッ、どこへ行くのよ、もう！」

すぐに楠葉を追う。

香霄は十五歳になっていた。

娘としての顔はまだ色濃くはないが潑刺な美女として育っていた。邑の子供たちの中で一番、背が小さかったが、それも野を駆ける白い足は羚羊のようにしなやで細い。

風に弄ばれる金の髪は金糸の波のように流れる。

やっと楠葉に追いつくと、香霄はハッと目を睜った。

楠葉が心配そうにのぞき込んでいるのはなんなんだろう？

おそろおそろ近づいてみるとそれは『人』だった。

けれど香霄は、自分たち一族以外の人種をみたことがない。

黒髪に、日に焼けて褐色の肌。

「——人！」

香霄はおどろいて声をあげたが、それ以前に彼が瀕死ひんしの状態だと気づいてさらに慌てた。

ぼろぼろの黒い衣服はべつとりと血に濡れていて、肩に矢が刺さっている。

楠葉がぺろぺろと、頬をなめているけれど反応がない——いや、ぴくり、と指がこわばったのをしって香霄は楠葉に命じた。

「この人を手当てするから運ぶの手伝って！」

「わかった、」

狐が一言、人間の言葉で応じると、軽い爆音とともに煙に包まれ、煙りが晴るとともに、人の姿になり、軽々と青年を担いだ。

「……ねえ、楠葉、どうしてこの人が倒れているってわかったの？」

急いで運びながら香霄は長身の男性に変化した楠葉に問いかけた。  
今は彼だが、この銀狐は雌。

楠葉は不思議な力を宿した狐だった。

風が冷たく吹いていた日、香霄は冴え冴えとした月をぼんやり見つめていた。

そのとき突然、狐がこぼれ落ちる月光を身に纏いながら現れて、  
「女神から、あなたにお仕えせよ、と命じられました」といった。

この邑の人間は直感で動物たちの言葉は解っていたけれど、まさか人の言葉で話す動物が現れるとはおもってもみなかった。

いや、楠葉はただの狐じゃない。

天からの使者だ。女神がよこした者を無碍にはできないし、香霄は寂しかった。

香霄は銀狐に 楠葉 という名を与えて常に一緒にいることを命じた——友達兼従者として。

銀狐——楠葉は承諾した。

それは二年前、香霄の母・月遥が他界した数日後の逢いだった。

「死にたくない、という声が聞こえたんだ」

「え？」

「生きて、帰りたいと……このものの思いが強かった」

香霄は楠葉の腕に抱えられている青年を見つめて眉をよせた。

「帰りたいって？ 好きで戦をしていたんじゃないの？」

「だれも好きで戦をしているわけじゃないよ、香霄。命じられて仕方なく戦をしなくてはいけないんだ」

「なんで、そんな命令をきくのよ」

「きかなきゃ、殺されるからだろう？」

楠葉の答えはいつも明快だ。

「死にたくないから戦で生き残るしかないんだ。人を殺したくなくとも」

香霄と楠葉は、琥珀の泉の前に彼を寝かせ傷を消毒してやりよく効く薬草をつぶして傷口に塗っていく。

「——っ！」

「みるだけでも痛そうな傷だなあ」

香霄は傷を見るたびに吐き気に襲われたが、とにかく彼を助けるため、我慢して薬を塗っていく。

（本当に、これで助かるのだろうか？）

でも、香霄が塗ったところの傷がス……と塞がっていく。

「助かるかな？」

「それは香霄のお心しだい」

「？」

楠葉はくすり、とわらう。

「にしても、この者は顔つきがよい」

「う、うん」

香雪はあらためて青年の顔をみた。

まだ少年といったほうがいいのかも。

体格もよく、背もあるし、十八ぐらいの青年かとおもったけれど、  
実際年齢は香雪と同じ年ぐらいなのでは？

綺麗に拭った顔は、まだ少年らしさを十分のこし、そして異常に  
眉目秀丽だった。

長い睫に、形の良い唇、そしてしなやかに鍛えられた躰。

楠葉も少年をマジマジとみつめて意味ありげに唇の端をつりあげ  
た。

「いいものをひろったな、お前の婿にいいかもしれない、邑の貧弱  
男たちは私的に気に入らなかった」

「冗談はやめてよ」

「それより、コレをこれからどうするか、だ」

「うーん、長老に話すとか？」

「即座に追い出される方にかける」

「じゃあ、私の家におくとか？」

「歩けるようになったら、厄介だろう？」

「楠葉がみはつてるとかじゃだめ？」

「無理ではないが……」

いいごもる、楠葉。

良案が見つからなくて悩んでいる二人に、

「なにをしている？」

突然、鋭い声が落ちてきた。

ハッとふりかえると、大きな岩からおかしそうにこちらをみている香薷いんじょうがいた。

香霄の従姉にあたる彼女はいつも神出鬼没で、毎度二人をおどろかせる。

『香』る『薷』薇……『香薷』という名にふさわしく、気高さを秘めた、切れ長で理知的な瞳。

筋の通った鼻筋に、紅をささずとも赤い唇をもつ彼女。

香霄と似た面差しだが、香霄にはない艶めくものを秘めていた。

けれどさすがは従姉、厳正な女神のような容顔に似合わず活発的で面白いことには進んで加わってくる。

「姉さんっ、おどかさないでよ！」

「すまぬ。しかしヘンなものを拾ったな？」

彼女も座り込んで少年をのぞき込む。

「だって、楠葉が……」

「私はべつに、あのままほっという見殺しにしてもよかったんだが？」

「見殺しにできるわけないでしょ！」

「だから私のせいにされてもこまる」

「うっ！」

頭を抱える香霄に香薷は微笑する。

「私は香霄の意見に賛成だな。長老に包み隠さず話してみたらいい。あのしわくちゃん顔には似合わずあの人は解ってくださるとおもっ」

「ほんと！」

「ああ、これはここだけの話だが、あの長老も若い頃、界外の間をかくまったことがあるとか」

「あの人が」

ぼん、と脳裏に浮かんだのは頬を染める老婆の顔。

（とても似合わない）

とりあえず、この少年を助けるためなんでも実行あるのみよ！

「ありがとう、姉さん」

さっそく長老のもとに向かい事情を話すと、

「……忘却薬をのませるのがいいだろう」

長老は唖れた声音でそういい、香霄に薬草を手渡した。黒く濁って毒のようだと香霄はそれをみて怪訝におもったけれど、それ以前に、界外の間をこの邑に連れ込んでしまったことを叱られなかったのが香霄にとってすごく不思議だった。

長老は邑の奥にある、大樹の根本に広がる、うつほにすんでいた。薄暗いところだが、中に小川が流れて澄んだ音が絶え間なくこだまする。

「——どうして、私を叱らないんです？」

「叱る？ なぜじゃ？」

「だって、界外の者がこの邑にはいつて」

「香霄が連れ込んだわけじゃなかるうに。その者が、勝手に迷い込んだだけだろう？」

「そうだけど……」

老婆か杖について何々とわらい、不満げな香霄をみやる。

「外部の人間がそう簡単にこの邑には入れない。だが入ってきた以上はなんだかの運命だと受けとめなければな」

「運命ねえ……」

（寛大というかなんというか）

複雑なため息を吐く香霄に長老は櫛の杖を目の前に向けろ。

「香霄、そなたも運命の輪にあることをわすれるでないぞ、」

「？……はい、」

長老の言葉の意味するところが解らないまま一応頷いて、香霄はその薬をもって自分の家へと帰っていった。

その薬の効力は抜群だったのか、薬湯と混ぜて少年に吞ませて数日後、目覚めた彼は記憶をすべて失っていた。

自分の名前も、出生もすべて。

ただ、心に残っているのは消化しきれない不安だった。

3

「黄希、（おうき）」

香霄によばれて黄希は振り返る。

「ハイ、なんででしょう?。」

食器をかたづけていた黄希はにこにここと笑い返事をする。

「……もう、なんで敬語つかうのよっ、前みたいに普通にしゃべりなさいよっ」

黄希は香霄が投げた木簡を巧みに避けて首を横に振る。

「以前の僕を反省して敬語を使うようにしているので、気にしないでください」

「気にしないでって、まだ横柄な口の利き方のほうが気持ちよかったですわ」

複雑なため息を吐く。

香霄は拾った少年に黄希、という名を与えた。

『黄色い肌』をして、この邑に迷い込んだ『希な人』

そういう意味をこめて。

因みに姓は『黒』、髪が漆黒だから。

最初目覚めた彼の口調くはどこか横柄で。

「お前はだれだ？ どうして予はこんなところにいる？」

開口一番それ。

命じることになれている、と言う感じだったのに、最近。

香霄が巫女となったとたんに口調と態度がガラリ、と変わってしまった。

昔は香霄の後についてまわる、自分よりちょっと年上（？）な弟だと思っていたのに、最近では邑になれ、また邑人にも可愛がられ（力仕事をさせられ）て、顔も美形だから娘たちに人気だったりする。

それが、腹立たいけど。

一昨年、香霄は巫女の『宣下』をつけ、拒否するまもなく邑人たちに巫女に奉られてしまった。

黄希を始め、邑の人たちも態度を変えてしまい居場所を見失い、仕方なく香霄は巫女になった。

巫女の仕事は、ただ平和を祈ること。

香霄自身、何時も村が平和であるようにと祈らない日はない。

（戦は辛いもの）

それは黄希が負った傷の深さを見ればさらにその想いは強くなる。だれも傷つかない平和が一番だ。

（でも）

「黄希は私のことをどう思ってる？ やっぱり巫女として見ているの？」

「はい。巫女はこの邑に必要な方ですから」

即答すると香霄の青い瞳に寂しさが満ちるのを知って黄希はハツとするが、仕方がない。

「私は、楠葉や姉さんと同じ答えを期待してたのに、どうして解わかっててそういうのかしら？」

「香霄自身と見て欲しい、ということですか？」

香霄はこくん、と頷く。

黄希は口を開き閉じしたが、思い直すように頭をふる。

「僕には、香霄を巫女としてみることにしか許されておりません」

「黄希……」

香霄は黄希の頬に触れようと手を伸ばすけれどゆるりと拳を作りやめた。

この手は人の願いを聞き取れる力があることを知ってしまったから。

香霄は黄希の願いを聞くのを怖かった。

#### 4

満月の夜。

香霄が歌えば花が咲き、暖かな風がわたり、草木が歌う。

平和を語る縷々とした歌声は邑に響き、舞えば、そら昊に風が生まれ、歌声は呪文となって夜空に吸い込まれる。

いつもは、香霄一人で舞い踊るが、ときに香薷が舞に参加することがある。

白い衣を纏う香霄に対して、香薷は赤い衣を翻し、彼女が舞えば風に香が乗る。

あまく軽やかな眠りへと誘うような。

二人の衣は薄く、月明かりに照らされて躰が影になって見える。女性のしなやかな身体が強調される服装。

いつみても、美しい……。

黄希は敬愛をこめて二人の舞を見つめた。

黄希は護衛として巫女の傍にすることを許された。

この 豊穰の舞 は許されたもの以外、決して見てはいけな  
きまりだから、彼女の護衛として、近くで舞を見ることができて黄希は幸せだった。

触れられないけど、ずっと傍にいられるのだから。

「ほれてるようだなあ」

「えっ」

くすくすと、足下でうずくまる銀狐が面白そうに黄希をみめている。

「香霄が好きなんだろう？」

「好きだ……悪いかな？」

「ふふふ、最近素直になって嬉しい事よ、だがけっして触れてはい  
けないぞ、もう彼女は巫女……いや社稷なのだから」

「え？」

銀狐の金色の瞳は、舞い踊る娘二人を追っている。

「あの二人は自分が人間だと思いこんでいるようだが、すでに社稷  
としての力を得ている」

社稷とは国家、同時に土地神のことをさす。

社 が民が安んずるところ、 稷 は民を養うという意味。

銀狐は目を細めて舞い続ける二人を見つめながら言葉を紡ぐ。

「まあ、その力が発揮されるのは一度魄（身体）が滅びてからのことだが……その時はすでに社稷としての自覚が芽生めばえているだろう」

魄<sup>からた</sup>が滅びる、

それは『死』を意味していることをしって黄希はキツ、と楠葉を睨んだ。

「そんなことは僕がさせない！」

「お前はのための、護衛だろう」

「……」

その通りなので黄希はなにも言えなくなる。それを見て狐は面白そうに目をさらに細めた。

この狐は時折、人を試すきらいがある。

ため息をついて白い花が咲く、地面に座り直す。それと同時にまた銀狐が語る。

「花月族の社稷は 主 を 廟<sup>やしろ</sup> として傍にあり続ける。その主が善政を行えば国は栄えるし、悪政を行えばその命を奪うというが、本来は代償なのだ、無償で願いが叶うとおもっている愚か者が多い

が  
「？」

「黄希、そなたはその命と代償に香霄になにを願う？」

「なにを、いつてるんだ？」

どくん、と心臓が痛く高鳴る。

その話をどこかで聞いたとがあるような気がしたからだ。

（一体、どこで？）

「なにを話してるの？」

豊穰の舞が終わって二人が黄希たちのもとに近づいてくる。

「なんでもありません」

黄希は汗を拭う大巾タオルを二人に手渡し首をふるが、

「黄希の恋人のことをはなしていたんだ」

「楠葉！」

（誰がそんな話をしていた！）

しかし、香霄は真に受けて、黄希の胸の衣を掴つかんで揺さぶりにかかる。

「やだ！ 黄希、そんな人がいたの？ なんでもっと早く教えてくれなかったのよ！」

「あ、いやその、」

黄希はキツ、と楠葉を睨むが、狐がフサフサのしっぽをふって決して視線を合わせない。

「うん、もう！ 黄希って恥ずかしがり屋なのね？ まあ、今度紹

介してね」

香雪はそういうが、香薷の方はくすくすと笑っていた。

花月の一族を探し出せ、

これは命だ、お前に与える最初の……。

命令だ！

「わああっ！」

黄希は悲鳴ひめいをあげて目覚めた。

「夢……？」

けれどもまだ低い声が、耳に強くこだましている。

額にのった汗を手の甲でぬぐうと、思った以上に汗をかいていた。髪もしつとりと濡れている。

最近、あの声に起こされ、深夜に目が覚める事がしばしばだった。

この邑の、どの者の声とは異なる音、そしていやらしく響く声音。

夢の人物は影に落とされて、顔は見えなかったが、畏怖を感じさせた。

「一体、なんなんだ……」

前髪をかき上げて、大きなため息をつき、黄希は汗を落として赴く。

あと数刻で星は消え、一番闇深い時が始まりそして空が薄くあけてくる。

冷たい水で身体をあらいながら、ふと、肩の傷を黄希は撫でた。傷跡は、触っても痛くはないが相当深い傷だったことはわかる。それも命を奪うような。

どうして自分はこの邑に生き倒れていたのか。

そして自分は一体何者なのだろうか？

「思い出さなくていいのよ、」

と香霄は言ってくれるが、時折、思わずにはいられない。

（記憶を失う前、自分はどこで、どのように生きていたのだろうか）  
黄希は頭を振る。

（忘れよう。すべて…）

そう自分に言い聞かせる。

きっと過去はろくでもないものに決まっている。

戦で何人も殺しているのは確かなのだから。

「いま、この時を大切にしよう」

過去の自分は死んだ。

おもむろに琥珀の石を取り上げる。

その琥珀の中に懐かしい花を見たような気がした。

きんもくせい  
金木犀……？

なぜ、その花の名が思い浮かんだのか？

懐かしいような、切ないような……。

じっと、見つめているのもつかの間、突然不穏な気配があたりに張りつめた。

ぴりぴり、と肌を刺すような。

（なんだ、この気配は）

木々から鳥たちが飛びだっていく、一斉に。

そして森の動物たちも。

黄希はいやな予感を覚え、香雪たちのもとに急いだ。

5

「蛮族を狩れ！」

「奴らは我らに仇なすモノぞ！」

「狩り出せ！」

邑に怒号が響き、火矢がいかけられる。

槍が、矛が空を切り逃げまどう人々を切り捨てていく。  
殺戮を楽しむ兵士たちの喜びの糧となる。

香霄は悲鳴をあげた。

「なぜこんな事に！」

いつも平和であるようにと願っていたのに、なぜ！

「巫女さま早くお逃げ下さい！」

「巫女さまだけでも！」

「黄希、巫女さま方をたのんだぞ！」

普段武器を取らない男たちがせめて武器の代わりになる農具を各々手に持ち決死の覚悟で邑を家族を守るために立ち向かっていく。

「だめ、生き延びなきゃ！」

その声は悲鳴に紛れて消える。

黄希は香霄の手首を取り、森の奥へと逃げる。

そのあとを銀狐がついてきて追っ手を神力によって撃退していった。

森が開けるのをみつけて、

（無事に逃げ延びられる、）

希望を黄希は見い出したが、突然香霄は立ち止まり手を振り払った。

遠く響く悲鳴や断末魔が香霄を引き止めたのだ。

「私は逃げたくない、皆と一緒に逝いく！」

「香霄！」

「さよなら、黄希は私の分も生き延びて」

「だめだ！」

黄希は香霄の手首をとって引き寄せる。

「行かせはしない、いや、行つてはならない！ 彼らの目的は君だ  
！」

「私？」

「君は神だから……王の願いを叶える生ける社稷なのだから……ッ  
痛！」

「黄希！」

黄希は突然激しい頭痛に襲われて膝を折った。

そして脳裏に何時も見える夢が色彩をおびてよみがえる。

いつも闇から命じる男、父王だ。

生への執念がおぞましく、周囲に畏怖を与えた。

『命令だ、花月の社稷を我に献上しろ』

かの社稷は王の願いをかなえるという。

我が子と認められたければその者を献上することだ。

さすれば、王位をお前にくれてやる。

（王位なんて、いらなかった。

ただ父に、良くできた公子だと、認められれば）

でも恋いこがれていた父はそこにはいなかった。

やさしく微笑んでくれた父は。

こんな、認められ方など意味がないのに…。

けれど、良くできた息子だとただほめられたくて。

幼い自分の甘えた、願い。

「黄希、大丈夫？」

心配に香霄は黄希の顔をのぞき込む。

彼は青ざめ、呆然と呟いた。

「僕は、この村を探すように命じられた……」

「え？」

「花月族の巫女は願いを叶える力をもつと聞いて、だから王は、僕に邑を探させた」

「黄希、まさかあなたがこの戦を招いたの！」

「違う！　僕はただ！」

（違う。僕はこの香霄を王に献上するために）

「いや、僕のせいだ……父王に命じられて僕はここを探していたんだ、戦をしながら、探っていた、そう、僕がこの邑に入り込んだからこんな事になってしまったんだ……僕のせいだ」

自嘲に嗤うと、黄希は立ち上がり香霄を抱きしめる。

「黄、希……」

その力強い抱擁に息ができなくなる。

「君は生き延びてくれ、いつかまた逢えるから」

優しく香霄の唇にキスをのこし、拳を強く香霄の腹部にいれた。

「黄希……」

香霄の白い手が黄希の頬に触れる、一途な想いを感じ取る前に意識がとぎれた。

「ごめん、香霄……」

もう君に会うことはない… 今生では  
でも後悔はない

（君に会えただけで僕は救われた）

人間に化けた銀狐に香霄を預けた。

「楠葉、香霄を頼む」

「黄希、死ぬな。香霄が悲しむ」

黄希は穏やかな笑みを残して禍々しく燃えさかる邑へとかけもど  
つていった。

6

「美しい娘ではないか」

軍を指揮する將軍は一人奮戦する娘……香薷をみてあごひげを撫でた。

花月族の邑を見つけ出し、女神を連れてくるよう命じられた將軍・楊嘉ようかの目は一人の女の動きを追っていた。

返り血を浴びながらも気丈に襲い来る敵から奪った刀で兵を切り裂く。まるで舞うように。

「あれが女神かもしれぬ、生かしてとらえよ！」

その命令に雄叫びをあげて香薷に襲いかかる兵士たち。  
大勢に襲いかられては為すべがない。

香薷は覚悟を決めたが、一閃。

黄希の剣が兵士等らを切り裂いた。

「香薷どの、早く逃げてください！ 巫女はあなたが死ぬことを望んでおられない！」

「黄希！」

「はやく！ ここは僕に任して、皆を連れて逃げて！」

「わ、わかった！」

鬼気迫る黄希の迫力にのまれ、香薷はそれに従う。

民が数人、香薷に導かれて邑を離れてくのを目の端にとめて、キツと將軍を睨む。

「楊將軍、これはなんのマネだ！」

楊嘉は黄希を見て目を一瞬だけ瞠ったが、それを隠すようにわざと戲け大きな動作で供手をする。

「おお、これは公子、いきておられたか。行方がしれず死んだもの

かとおもいました」

「なぜだ、ただ一人を王に献上すればよいことだろう？　なぜ殺戮など！」

「いいえ、これは王の命令です、一族を根絶やしにせよ、と」

「それは予が許さぬ！」

「！」

黄希は大地を蹴けつて、一閃のもと、楊嘉の首を刎た。  
血しぶきが虚空に散り、首がごろりと落ちた。

冷徹な剣聖と唱われた、公子の剣の腕は鈍ってはいなかったが、しかし、

「ぐはっ……」

楊嘉の剣は黄希の腹を貫いていた。  
首がにやりと嗤ったのを黄希は知った。

（香霄……）

「黄希……？」

香霄は、黄希に呼ばれた気がし、優しく臉を愛撫するきらめく陽光に促され目をあけた。

戦は、殺戮はおわったの？

みんなは……。

自分を心配にのぞき込む顔には黄希の姿はない。

「よかった巫女、無事で」

「……黄希は？」

「彼は……」

皆の顔が曇る。

それが意味するのは……。

「黄希！」

「巫女！」

「まだ危険です！」

香霄を引き止めようとするが、香霄は風のように手をすり抜けて  
邑へ駆ける。

どうか無事でいて！

生きていて！

8

殺戮はおわり、至いたる所に血煙が漂ただよっていた。

茉莉の花も踏みにじられ、また血に染まり、赤く萎れ、その血の草  
原に、たくさんの軀が転がっていた。

けれど邑の人間の軀より兵士の軀の方が多い、なぜ？

血でぬかるんだ大地をさまよい、吐き気に耐えながら香霄は黄希の姿を求めた。

そして長老のうつほの前に倒れている黄希を発見した。  
深く腹部を刺されたのか下半身がどす黒く濡れている。

「黄希！ 黄希っ」

香霄の悲痛な声に血に濡れた瞼がかすかに反応し、うつろな瞳が香霄をとらえる。

「巫、女？」

「黄希、じつとしていて、いま、なおしてあげるからね！」  
黄希は首をかすかにふる。

「もう、僕は助からない。はやくここから逃げて……」  
「そんなことない！」

香霄はもてる力をもって傷を治そうとしたが、黄希の臍がそれを受けない。

力が押し戻されてしまう。

「どう、して……」

「ねえ、香霄……君は金木犀の花をみたことがある？ 僕の国にはたくさん咲き誇るんだ、まるで君のようにあまやかで優しい香りがあるんだ……」

「黄希！」

（ただ、あなたの傍にいたい）

その思いが軀となつた軀に残っている。

ただ、傍に……。触れられる存在でなくとも傍にいたいことを望む。

「黄希……」

涙が、黄希の頬にはねては落ちる。

「黄希、また逢えるのではなかったの？」

あなたが死んでしまつたらもう、逢えないじゃない。

「……そうだ」

以前、長老が巫女の最期の願いは絶対なるものといっていたことを思い出す。

「巫女になつていてよかった、ううん、そのために私は巫女になる運命だつたんだ。あなたを助けるために」

そう思えば、巫女になつたことに後悔はない。

香霄は微笑んで冷たくなつた黄希の唇にキスをし、落ちていたヒ首を拾つた。

「私の命をあなたにあげるから、生きて、そしていつの日にか私を目覚めさせて」

強く呼んでくれたらあなたの願いを叶えてあげるから。

（長い、永い年月をかけて）

もしかしたら、私はあなたのことを忘れてしまつかもしれない。

『ただ傍に。』

でも、その思いは忘れないでおくから、今度はともに逝ってあげる。

9

「香霄……、」

香霄を追ってきた香薷と楠葉は彼女の変わり果てた姿を見て目を瞠みはった。

香霄は、空に向かって伸のびる青々とした若木へと姿を変えていた。

その木の根本に健やかに眠る黄希が……。

それから永い時が流れて……。

一族は千々に散って、消えていった。

楠葉は遠い東の島国に渡り、香薷は数百年後に小霸王の子を産んでこの世をさった。

いや、また愛しい人に出逢うために旅立った。

私はそれをずっと見守ってきた。

でも、私はいつ目覚めることができるのだろう。

本当にその日が来るのだろうか？

永き夢は時に現をみせる。  
風になりその時を旅する。

でもその旅を楽しむほど、生きていた香霄としての記憶が、手からこぼれる砂のようにさらさらと失われていく。

いやだ、失いたくない。

この想い、私の願いだけは。

大切な思いを強く握りしめたとき。

誰によばれた。

明るく眩しい陽光が瞼を優しくなでて。

香霄は、ゆつくりと瞼を開けた。

## 第五章・版図

### 第五章・版図

1

開運一年。

だが南唐では保大二年。

南唐皇帝・李景はこの世の栄華を極めたきらびやかな後宮でまだ幼い我が子・從嘉をあやしなながらも、そのまなざしは違っていた。

南の地、ビンに。

李景、字は伯玉。

先帝・李弁が二年前に亡くなり李景が二十八歳で皇帝に即位した。容姿端麗で、詩余を好む文人皇帝だが野心家でもある。

南唐が領有している土地は、淮南・江南とよばれるところだ。

長江下流・南北までまたがり、隋の煬帝が開いた大運河の起点である揚州を中心として、唐代より経済的繁栄をほこり、長安・洛陽の文化も、大運河を通じて送られた。

李景の父・李弁は在位期間中、乱世であるものの、ひたすら戦はさけ民休につとめた。

そして李弁は臨終のとき『他国と戦を避けるべきだ』と、いつていたが、

（私は父とは違う）

李景はにやりと笑った。

（時は熟した）

皇帝として威厳をしめすにはまず領土を広げることだ。  
そしていずれは華北にとってかわり天下を頂くこと。

それが乱世を治める唯一の途ではないか。

李景は脳裏に地図をひろげ、南唐軍という駒を福州を首都とする南のビンに進める。

いまビンは内乱の途にある。

それに乗じて領土を広げるに越したことはない。

ビンは滅びその領土は我がものとなる。

李景の思い描く版図にビンの地が消え、自領となる。

そして江南で残るは杭州を首都とする、弱小の『呉越』

ビンを攻め取れば、南西北から呉越の地を攻め滅ぼし華北の朝廷とならぶ勢力になる。

（いける）

今、いままで味わったことのない緊張と興奮が李景の身体をめぐった。

「父上？」

從嘉は父の目に危険なものを感じ、怯えるように不安げに声をかける。

李景はハツとして、穏やかさを取り繕い重くなった息子を抱き上げながらいう。

「父は決めたぞ、ピンをとる」

「？」

「これはいずれお前のためにもなることだ」  
李景には似合わない不敵な笑みだった。

同年、十二月、南唐は建州けんしゅうを攻撃する。

## 2

二十歳の若い青年二人が、金木犀きんもくせいの香りが漂う杭州の街道を歩いていた。

秋も深まり比較的温暖な杭州も時折秋のすずやかな風が吹き抜ける。

ふたりとも庶民の服装をしているが、あふれ出る気品は隠しようがない。

一人は穏やかだが威厳を感じるし、もう一人は稟とした鋭敏さがある。

街の者たちはその青年たちが何者であるかわかっていたが、あえて大げさに拝礼などせず、ひそかに目礼をする。

この国を安寧に導いてくれる青年たち、若き呉越王とその宰相に感謝と敬意をこめて。

「隆道、やつと杭州も落ち着いたな」

呉越王・弘佐は愛しげに街を眺ながめて目を細めた。

五年前。

大火の時、民は絶望と悲嘆にくれていたが、いまは違う。

政策がうまく行き届き、街は整備されて治安は整い、貧しい者でも三食の飯が食せるようになっていた。

たった数年で、生活水準が向上したのだ。

そして外国との貿易が盛んになり、さらに塩田の開発を進め、経済も活発になっていった。

子供たちは元気にはしゃぎ遊び、大人は麗らかな陽気につられ詩余を口ずさんでいる。

「みな、兄上のご尽力です」

弘宗は供手をして微笑むが弘佐は、

「いや……」

と軽く首をふる。

「私一人では、ここまで成ならなかった。お前や臣下たちの協力があつてこそだ。礼を言う」

「あ、兄上、どうかお顔をあげてください、嬉しくは思いますが、いまはお忍びの最中でしょう？ 変におもわれます」

「そうだったな」

弘佐はくすりと、微笑む。

お忍びといっても弘佐は王になってからもひまさえあれば一人（と香霄）で街に出かけているのでお忍びにはあまりなっていない。

街の者も弘佐が時折自分たちを気づかって街に降りるのをしているからこそ騒ぎ立てたりしない。

「以前はふたりでお忍びをしてとんでもない目にあったからな」

弘佐はしみじみと過去を振り返る。

父の放った刺客に殺されかけて、弘佐は一時行方不明になった。

（まあ、あれはあれで貴重な体験であつたが）

弘佐は内心苦笑を漏らす。弘佐は真剣な表情をつくりいう。

「そうですよ、それにまた命を狙われる可能性だって十分にあるのだから、気をつけてくださいね」

「大丈夫。私は、お前や将たちの腕を信用しているから」

弘佐はちらりと、視線を後方にやった。

数歩はなれた位置に護衛二人が弘佐たちの後をついてきている。武官らしい服ではなく平服なので民たちに混じってしまいがちだがしっかりと弘佐たちを見張っていた。

弘宗がついてくるように命じたのだが、この中で一番の剣技をもっているのは弘佐。

国一番の剣技を持つ将と手合わせしても、引けをとらず、みごとな剣捌きだ。

弘宗はため息をついて、

「わかつていいるならよろしいですけど、でもどうして今日は私をさそってくれたのです？ いつも、私が気づかないうちに風のように消えて、いつのまにか、ふらっと帰ってくるのに」

「うん、ここはお前とともにお忍びして楽園をつくる決意を固めた街道。もう一度ふたりでここにきて自分がおこなったことが間違い

ではなかったと確かめたかつたし、あの大火から立ち直った街を隆道と見たかつたのだ……、それと」

弘佐は懷から手紙を取り出し、弘宗に渡す。

「弘純兄上こうじゆんが杭州に来ている」

「弘純兄上が？」

「手紙ではなく直にあつて話しがしたいそうだ、重要な話があると……、」

「ビンの情勢でしょうか？」

弘宗はハッと手紙から顔をあげ、訊ねた。

弘純はときおり弘佐宛てに手紙を送る。

それには他国の状況が事細かにかかれていてとてもためになり、最近の手紙にはビンの状況を書いてくる……。

現在ピンは内乱のただ中にあり。

ただの内乱ならまだしも、南唐がビンの建州を攻略した。

近く、ビンの領土は南唐のものとなり、そうなれば呉越は南西北、南唐に囲まれてしまう。

呉越国は中原の朝廷を宗主国と仰ぎ、毎年莫大な贈り物をし、そのかわり南唐を牽制してもらっているのだが……。

「兄上は、どうお考えなのですか？」

「期をみている」

弘佐ははつきりそう答えた。

「国が滅びゆくのをただ黙って見ていることはできない」

（そう、ただ黙っては……）

弘佐はそう思いつつ。

版図、か。

以前は この世の楽園 を実現にさせようと必死だった。  
自分や臣たちの手で国を良くしていくこと、それしか考えてなかった。

そのかいがあつて、今ようやく軌道にのり国は落ち着いてきて弘佐の望む国に近づいた。

それで十分だとおもっていたのに……南唐と同じようにどこかで天下を夢見ている自分に気づく。

手の届く範囲で国を治めていられればいいと思っっているのに、天下がチラついてしまう。

たとえ弱小の国でも他国の隙を見て乱に乗り、勢力を伸ばすことができれば、疲弊している中原の王朝と取ってかわる。

そう壮大な構想は思っているそばから途端に冷める。

弘佐は深いため息を吐いた。

（人間の欲望とは、いやなものだな）

「香霄といられることの方が大切なのに……」

「兄上……、香霄とは誰です？」

弘佐はハッと、口を押さえる。

「あ、いやなんでもない」

いけない、おもわず口をついてしまった。

想いや、悩んでいることが思わず口について本音がもれてしまうことがある。

心だけに留まらない想いが。

今、香霄がいなくて良かったと思う。

彼女は今、『眠っている』のだから。

この時期、香霄はどうしようもない眠りにおそわれ耐えられないと言う。

たしかに弘佐が王についてからしばらく彼女は姿を現すことはなかったが…。

毎年、大火がおこった時期に眠りしばらく姿を現さない。

（なにか関係があるのだろうか？）

でも香霄が眠っている間は、彼女への気持ちを押さえずから、少し楽だった。

でも会えないときの方が心細いし、不安がぬぐえない。

（香霄……）

今度は声に出さないようその名を強く呼んだ。

3

弘純たちと再開即位式以来、五年ぶりだ。

だから以前とかわからない弘純をみて弘佐は嬉しくなった。  
待ち合わせ場所は杭州の港。

港には弘純の入港を特別許可しているので、問題なく入れるよう  
になっていた。

弘純の数歩下がった背後に晁衡の姿もある。

弘純は一応服装をあらため紺を基調とした商人らしい服をきてい  
るが、晁衡は相変わらず白い狩衣に身をつつんで、異国の香りを漂  
わせている。

「兄上、晁衡どの、お久しぶりです！」

供手をする弘佐の背をかるくたたいて弘純は破顔した。

「見違えたぞ。前はまだ子供子供していたのに成長したな」

「もう子供ではありません五年も経つのですから」

「もう五年か。ああ、この国をみたぞ、弘佐。お前が望んだ国が出  
来つつあるな。」

他国をみて歩いたが、民が普通の暮らしをしているのは今のところ  
呉越だけだ。おっと……、一国の王になれなれいか？

「いいえ、かわらずに接してくれる兄上がそのまま嬉しいです」

「でも後ろの丞相はふてくされてるぞ？」

「ふ、ふてくされてません、こ、子供じゃあるまいし」

ただ、兄の信頼が弘純ばかりに寄せられるのがちょっと悔しいだ

けで。

つまりヤキモチだ。

「ここで話はなんだから、船で土産話でもしないか？」

晁衡がそう勧める。

「おう、そうだな。いろいろ話さなければならぬことがあるし」

「また、船で日本国まで連れて行こうと……しないでしょね？」

「まさか。だが見せたい国はおおくあるがな」

苦笑して弘純はいい、船室に案内する。

船室の中には珍しいものがたくさんあった。

とくに、水晶でつくられた灯籠とうろうがとても明るく真昼のように船室を照らす。

「これは？」

「ああ、南唐の宮中にある灯籠だそうだが、あるお偉い方からもらい受けた。あと茶は楚の銘茶だ、なかなか手にはいらないものだ」

得意げにいいながら透明感があり芳ばしい香りをたてる品茗杯を人数分わたす。

その品茗杯は越州えつしゅうの青磁。

蓮を連想した柄の上質で優美な一品だ。

弘佐は茶杯を両手で包み一口飲んでため息混じりの感歎をもらし  
呟く。

「おいしい……」

「だろう？」

「なんだか、兄上がうらやましいなあ。あのとき海賊になっていればよかった」

「あ、兄上！」

弘佐の言葉に弘宗があわてて振り返る。

「ははは、今からでも遅くはないぞ？ 王位を弘宗に譲って俺たち

の仲間になるか？」

「冗談です。憧れはしますが」

弘佐はくすくすわらって、安堵をつかべる弟と、少し面白くない顔をして襟首をかく兄をみくらべる。

そしてしばらく弘純と晁衡の土産話で花を咲かせた。

ふたりの旅も多くの葛藤があつたらしい。

弘純は海賊だが、資金を稼ぐために貿易商人として各地をまわっては情報を集めては弘佐に報せてくれていたが、その間、日本に一度帰り、他の海賊と一戦交えたり、嵐に遭い船が沈んだり…波瀾万丈な日々をおくつたらしい。

その度に弘純と晁衡はケンカをしながらも、絆を強くしていった。その証拠に昔感じたよそよそしさがふたりの間から拭われている。『ところでだ、弘佐』

弘純は地図を卓の上に広げて弘佐を呼ぶ。

「軍を動かす気があるのか？ ……ビンに」

「ええ、あります。兵をださなければ南唐勢力をひろげる事を許すこととなり、いずれ呉越は飲み込まれてしまう。それに朝廷から頂いた元帥の職をはたせません」

ことり、と音をたてて品茗杯をおき、口元を綻ばせる。

そして広げられた地図を見るその顔は、兵馬を統括する兵馬都元帥の表情にかわった。

鋭利で剛毅な光が瞳にあがるのを知って弘純は弟の将器にゾクリと肩が震えた。

この五年で弘佐は外見だけではなく、心根もどこか変わった気が

した。

いや、成長したといったほうがいい。

（安穩に樂園を目指すだけではいけないということを知ったのだろ  
うか？）

弘佐は意志が強く決めたらどんなことでもやり遂げる。

——もしかしたら弘佐は天下に覇を唱えることが出来るかもしれない。  
弘佐が望めば、だが……。

ビン、という国は王審知<sup>おうしんち</sup>が建国した。

国土は山岳部が多いが、しかし首都の福州は海に面し海上貿易の  
要。

審知は兄に従って兵を率いてビンにはいり福州などを占領し、唐  
朝は彼の兄を福建監察史に任じ、そしてその兄の死後、王審知があ  
とを継いだ。

王審知の先祖は代々農民で、彼は民の事情に通じていたので、生  
活は質素儉約主義に徹し、国政については、租税や労働を軽減して、  
福建地域の経済文化の発展を促進した。

審知は民にとって良い為政者（王）だった。

しかし、彼の死後、彼の子供たちによって国の平和は崩れはじめる。

ピンは呉越と同じく中原の王朝を宗主国と仰いていたが、長興四年（九三三年）王延鈞が福州で皇帝と称し、国号をビンとした。

その後、骨肉の争いがはじまったのだ。

審知の子、延翰は弟・延鈞に殺害され、その延鈞も息子の継鵬に背かれ殺された。

以後君臣が乱れて内乱になり、その隙について南唐が建州を攻撃したのである。

「ピンといっても滅んでいるに等しい。福州節度使に命じられた、李仁達が李景に背いて、呉越に助けをもとめていると訊いたが本当か？」

「ええ、よい大義名分ができました」

静かに告げる弘佐の目はここにある地図をみていない、脳裏に浮かぶ版図を凝視している。

弘純は弘佐の真剣な表情をみつつ、地図の上に人差し指をおいて行軍ルートを仮想してなぞる。

陸路と水路。

「ただ兵力が問題だな、南唐が呉越の三倍ちかくある」

「『呉越は南唐には勝てない』と、臣たちは口々にいう。先王のとき大敗した以来それがいまだ尾を引いているのです」

なさけない、と吐き捨てるように弘宗はいうが、

「…… 大事な、いまだビンの 邪気 ははれていないから……」  
晁衡が意味ありげにいった。

「邪気、とは？」

「言葉の通りだ。聞くところによると、ビンの先帝は呪術に凝っていたらしい。」

巫者（黒魔道師）や道士をあつめてはその言を信用していたそう  
だ。誰かをあやめる呪術もおこなっていたかもしれないな。

力がないのに呪術を扱えば大きな代償がふりかかる、今、民も兵  
も巻き込んで血の代償をあがなわれているのだろう」

「代償、ですか…… っゴホゴホッ」

突然、咳がこみあげ、弘佐はがたと崩れ床に手をついた。

「大丈夫か、弘佐？」

弘純が慌てて弟の背をなぜ、弘佐は無理に微笑んだ。

「ええ、もう大丈夫です。…… 少し外に出てきていいですか？」

「あ、ああ」

弘佐は立ち上がって甲板に向かう。

そして甲板に出るとさざ波の音が強く耳に入り、外との明るさの  
違いにおどろく。

話し込んでいたせいでいつの間にか陽はくれ、夕闇に沈み、松明  
が掲げられる時刻になっていた。

（早く帰らないといけない）

そう思いながら、また咳が繰り返しむせる。しかし今度は咳が止まらず、苦しくて息ができない。

とめようとすると酷い頭痛に襲われさらに苦しく気が遠のく。

刹那、強く背をたたくような衝撃のあと、嘔吐した。

松明に照らされてそれが明らかになった。

手を濡らしたのは――血。

弘佐は震える手をきつく握った。

（病か……）

いい知れない恐怖が襲ったが、誰かが来るのをしってあわてて口を強く拭い手巾を海におとす。

「弘佐どの、大丈夫か？」

晁衡が静かに聞いてくる。

弘佐は恐怖を笑みで押し隠し、

「……いえ、平気です、なんでも」

「嘘をつくな」

いうや、晁衡は弘佐の手をつかまれ、かがり火に照らされてあらわになる。

血に汚された手が。

「病におかされているのか、呉越王」

「……」

晁衡は大きなため息をついて、おもむろに手巾で弘佐の手を丁寧に拭う。

「晁衡どの？」

「誰にもいわない。皆に知られると困るのdarou? これから軍を動かそうとする元帥としては。だが話をきかせてもらうぞ」

4

晁衡からもらった薬のお陰でだいぶ落ち着いた。

その薬は晁衡の母がくれたものだという。

晁衡の父が病におかれ、吐血したのをみて幼かった晁衡は慌てて母が住む森へと駆け込んだ。

……すると母は薬草を渡してくれたそうだ。

そして薬をつくって父に飲ませるとたちまち病がやわらいだ。

「これは少量で良く効く。この間一度、日本に戻って薬を造ったのだ」

そういい、薬を弘佐に分けた。

「助かります」

「……弘佐どの、香霄に願ったことは？」

鋭い視線で晁衡に訊ねられて弘佐は首を振る。

「——いいえ、一度も。でも香霄は言いました。国のためになることならば、いくらでも願いをかなえると——私は社稷だから、と」

「国のためになることが……」

晁衡は孟子の一節を思い出す。

（曰く、社稷を重きとなす……、か）

社稷は土地神のことを指すが、国家を指すこともおおい。

社　が民が安んずるところ、　　禊　は民を養うという意味。

香霄はつまり民を守る神といったところで、弘佐、つまり呉越王は　社禊の廟　というところなのだろうか？

となれば為政者とともに社禊があるのことだろう。

少し中華思想とは離れるところだろうか、この考えは……？

晁衡は内心おもい苦笑した。

まあ、神の序列は人間が想像して広めたもので本来は序列などないのかもしれない。

神は神——人は人だ。

「民の、個人的な幸せは民自信が見つけるものです」

弘佐は紺の空に輝きを増してきた月と、よりそう小さな星をみつめながらつづける。

「私が王として成すことは、民の生活の保証。生活が立ちゆけるように、政をしなくてはいけない。

実は、あるとき香霄に訊かれたのす。

『民の助けになりたかった』と答えたら笑われました。

当然私はムツとしましたが、彼女は諭すようにいつてくれたのです。

個人を助けるより大勢の幸せを守りなさい、と。

すべて為政者の手によって民の生活がにぎられている。そして生かすも殺すも王しだい。でも民は王自身のものじゃない、王が民自身のもの」

晁衡はフツと唇の端をつり上げた。

「社稷が諭すか。おもしろい」

「そう、ですか？」

「で、その香霄は今いったいどうしている？ 気配すらない」

「眠っています」

「眠っている？」

晁衡は首を傾げて問う。

「この時期になると、とても眠くなるのだそうです。??以前もそうだったでしょう？」

風を呼んだ後、香霄はそのまま秋が終わるまで姿を見せることはなかった。毎年そうなのです」

「寂しい、か？ 弘佐どのは」

「えっ！」

突然、的ハズレな、でも的を射ている質問に弘佐はドキリとして頬を赤くする。

「ははは、先ほどは何事にも動じない将器をみたが、まだからかいがある」

「晁衡どのっ！」

晁衡は笑って、しかし冷めた、真剣な表情で弘佐をみつめた。

「弘佐どの、私は、いまでもあなたを日本につれて帰りたい」

弘佐はその言葉に怪訝に眉をひそめた。

「晁衡どの……、なぜです？ あなたは以前も私を日本に連れて行くといったが、何か理由があるのですか？」

「私には人の生き死にがわかる。」

日本で、私は陰陽師として貴族に請われて未来を見て予言してきた。

しかし、貴族の場合は己の闇に怯え死ぬものが多い。

それにたいして大陸の者のほとんどは乱世にのまれ、餓鬼や戦で死んでいく。

でもこの国の民は為政者のために死ぬことはない、ほとんどのものが寿命で死ぬのだ。??ただ一人を除いては」

弘佐は晁衡の言葉の意味がわかって、悪寒がはしたが、同時にあきらめたし、すこし安堵した。

楽園 は造られていくのかもしれない。

(私の命一つで)

「いつ、私が死ぬのか、晁衡どのにはみえているのですね？ では私はその間にやらなくてはいけないことをやらなければ……」

「だがこの国を離ればあなたは生きることができるかもしれない」

「その代わり民が他国と同じ末路をたどるのは許せない」  
強く言い切る。

「??死ぬのは怖い、とても。でも私一人の命で民の命数が長らえ

るならそれでいい」

けれどしたい弘佐の表情がゆがみ、恐怖や悲しみが混じり、本音を漏もらした。

「こんな風に言い切れますが、実は怖い……。自分が死ぬというのが、私が一生懸命

築いたものが消え去ってしまうことが、悔しくも、惜しくも……」

（いつ、私は死ぬのか？）

最近胸がとても苦しくなるときがあつたが血を吐いたのはこれが初めてだった。

これでも十二分に動揺している。死にたくないと思う、けれどそれと夢を天秤にかければ、命を諦める選択をする自分がいる。

それに。

私はもう長くはないのかもしれない……助からない。

身体が震え、涙が頬をつたう。

「怖い……」

晁衡は切なく息を吐く弘佐を抱きしめた。

「いまは、泣いてもいい。弘純どのやみんなには見られたくはないだろう？」

弘佐は声を殺して、どうしようもない運命を静かに受け入れようとした。

「弘佐、これを」

別れ際、弘純は弘佐に錦に巻かれた一振りの刀を手渡した。

赤鞘、金の鐔に白い柄、見事な異国の刀。

弘佐は柄を握って鞘から抜刀すると鋭く、優美な刀身が現れる。

「日本刀だ。妖魔を祓うといわれている。八幡神宮の、といってもわからないか。」

……まあ南唐と戦うならこれを念のため腰におびている」

「ありがとうございます、兄上」

「俺はもうすこし福州の様子をうかがってくる。それまで臣たちを納得させるよ」

「大丈夫ですよ、元佑兄上は強引で押しが強い」

弘宗は苦笑して言う。

まだ年若い自分たちに不満をもっている臣たちがいるが、強い意志で弘佐は臣下たちの反対意見を退けて兵を挙げるとみている。

兄には不思議と人を惹きつけ従わせる力をもっているのだから。

「もし軍を動かすときはこの弘環、船艦を率いて加勢すると約束しよう」

弘純は弘佐の前に膝をつき臣下の礼をとった。

5

深い闇にうかぶ、下弦の月。

薄雲が波となし、白銀に輝く船を運んでいるようだ。

深夜、弘佐は中庭におり季節に関係なく咲き誇る金木犀をみつめて切なく呼びかけた。

「香霄……君の姿がみたい」

ふと父を思い出した。

いまの自分と同じように香霄を呼んでいた父を。

（あの時、父も同じ気持ちで香霄を呼んだのだろうか）

そして彼女は父のもとに舞い降りてきたのだろうか、金木犀の香をのせて。

父も、祖父も香霄のことが好きだったのだろうか、

愛していたのだろうか？

香霄は彼らに対してどのような気持ちを懷いていたのだろう。王は香霄に魅了される呪いをかけられているのかもしれない。実際そうだとしても……。

（それでもいい）

彼女が側にいるなら。

いてくれるなら。

でも、その時間が自分には長く残されていない。

身体が朽ち始めている。

晁衡からもらった薬が効いているのか、血を吐くことはないが、ひどいめまいに襲われるときがある。

もし、薬の効能が切れたらどうなる？

その時は死ぬときのだろうか？

恐怖と一つの思いが弘佐の身体を震えさせた。

死んだらもう彼女には逢えない。

「香霄——！」

弘佐は心の底から香霄を呼んだ。

逢いたい。

ただ傍にいて欲しい。

私の中にある死にたいする戸惑いや恐怖を消し去って欲しい、——  
時でもいい香霄、君が欲しい——香霄！

そのとき。

濃い香りとともに風が吹きわたり、ざわざわと木々が揺れ、月のやさしい白い光をまとうて姿を現した香霄は社褌と言うより――女神。

風に弄ばれ空に舞い散る金糸の髪。

碧の瞳が宝玉のように輝き、弘佐を見つめ、彼女はやさしく微笑みかける。

「弘佐どうしたの？」

「香霄……」

弘佐は手を伸ばし、つよく香霄を抱きしめた。

香霄は、優しく包むように弘佐の頭を抱きしめ、弘佐は甘えるように香霄の胸に顔を埋め、そしてさらに強く抱きしめる。

紗のようにかるくて、重みのない香霄の身体。

強く抱きしめれば霧散してしまうかもしれない。

でも抱きしめずにはいらなかった。

いつも風のように弘佐を包んではどこかへ消えてしまう彼女を逃したくはなかったから。

「私が眠っている間になにか、あったの？ 辛いことが、悲しいことがあったの？」

香霄は優しく問いかける。

でも弘佐は答えない、ただただ強く香霄を抱きしめる。

「弘佐、」

「香霄が欲しい。とても……」

「今日の弘佐は変だわ……神と人の壁は、」

「今、超えてみせる。君がとても欲しい」

強くない、これ以上、言葉を継がせないよう香霄の唇をふさぐ。  
甘く、切ないものが香霄と弘佐に満ちる。

おかしいのは弘佐だけじゃない。

（私も、おかしい）

弘佐がいなくなってしまう恐怖がある。

どうして……。

遠い昔、手のひらから零れていってしまった恐怖がざらりと、  
した感触で戻ってきたような。

それが痛くて切なくて??。

香霄は涙がつたうのをとめられなかった。

弘宗は弘佐を探していた。

弘佐の執務室にて、気になるものをみつけ、訊きたいことがあったからだ。

それはうす紙に包まれた薬。

（もしかして兄上は……）

異様な焦りが弘宗の全身を巡った。

少々体調が優れないときがあるといっていたけれど、それはただの風邪ではないのでは？

寢室に訪れたが、弘佐がいなかった。  
さらに心配して探した。

しかし人を呼ばなくともすぐに弘佐の姿を見つけることができた。  
弘佐は院庭にいた。

上に袍を羽織らず薄着なのにはいらだちを覚えたが、とりあえず、声をかけようとした刹那、暖かい風が縁を巡った。

弘佐の前に女神が舞い降りたのを知って弘宗は目をみはる。

とても美しい女だった。

美しく、惹かれずにはいられない。

まるで嫦娥（月の女神）が月から舞い降りたような……。

透けるように白い肌、碧眼、金の髪、十六歳くらいだろうか？

「あれが兄上が言っていた女神なのか？」

美しいが、危険だ。

弘宗にはなぜか彼女が『禍々しいもの』にみえた。

だが、愛を語らうふたりの邪魔は出来なかった。

6

軍議は紛糾した。

「出兵するだけ無駄です。第一、ピンを救援なさる義理がどこにある」

「あちらはピンの兵も内に抱き込んだ、無惨に敗北するのは目に見えている」

「王はみすみすこの国を南唐に明け渡すおつもりか！」

古参の將軍たちは南唐がまだ『呉』だったときの大敗の恐怖におびえ、兵を挙げることが能わず！ とさけび、文官たちも弘佐にむやみに兵をだすものではないと諫めはじめたからだ。

若輩で、戦を知らぬ王という思いもあるだろう。

だか弘宗を筆頭とする若い者が勝てると主張する。

敗戦に怯えて、降伏の途しか、考えない愚か者、と。

紛糾を極めたとき、呉越王は机を強くたたき、臣下たちの言を絶つ。

そして一同を見渡し通る強い声で憤然と言い放った。

「吾は兵馬都元帥である。なのになぜビンに兵を挙げることが許されない？

諸將はこの国で養蓄し、吾ひとり、身をもって先んずることができようか、いや、  
できまい？？吾に異議ある者は斬る！」

いうや、皇帝から賜った剣を抜きはなち、卓をまっぴたつに斬り捨てる。

諸將はその弘佐の迫力にのまれ、否といい続けることができなかった。

## 第六章・福州へ（前書き）

とりあえず、コピペ。ゆっくり校正します。外字がケータイでみられないところがあるとおもつのでそこちらほら

## 第六章・福州へ

？に駐屯する南唐軍の兵は約十万、そして呉越の兵は三万。

明らかに、兵力において負けている。

しかし、南唐軍は？の残党討伐や呉越との国境付近に兵を割き、福州に駐屯している兵は少ないだろう。

いや、実際に薄手になっていることは弘純の報告をつけている。

陸から攻撃すると見せかけて、？江をさかのぼり南唐軍のふいをつく。

兵を水陸二手に分け、弘佐自ら出陣する。 統軍史は張？、趙承泰を推した。

南唐軍に怯えている老将より若く、腕の立つ将ものを弘佐は選んだのだ。

——十二月、船艦三百を率いて杭州から？へたつ準備が整った。

2

「兄上」

明日の出陣に備えてはやく休もうと寢室に向かうところを弘？に引き止めた。

弟はどこか緊張した面持ちで、兄をみつめる。

「どうした、隆道？　なにか問題がおこったのか？」

「そうではありませんが、すこしお訊きしたいことがあって……」  
「そうか、では」

弘佐は人呼んで茶を用意させるが弘？は首を振る。

「その必要はありません。これを」

弘？は弘佐に薬をみせた。

弘佐は内心ハツとしたが、表おもてではホツと安堵のため息を吐いてみせる。

「ああ、隆道がもっていたのか、薬が足りなくてさがしていた」

「なんの薬ですか？」

「……これは単なる咳止めの薬だ。私が喘息ぎみなのはしっているだろう？」

「にしてはこの薬の成分は強すぎる。兄上、私には嘘をつかないでください。もしかして……兄上は病をわずらっておいでなのではない！　もしそうならこの出陣はとりやめてください！」

「できない」

「できないなら、私が代わりに兵を率います！」

「お前にはこの国の守備を命じている、その命に背くことは許さない」

厳命に弘？は唇を噛む。

臣たちは弘？のほうが厳しく清廉な印象イメージが強いが、しかし、一番厳しいのはこの兄の方だ。

普段ふだん穏和で優しい弘佐は、自分の命に反する者には非常に厳しい。

「兄上……」

弘？はそれ以上言葉ことばを継ぐことができなくうつむくのを弘佐は微笑で、肩に両手を強くおいて、弘？の不安をやわらげる。

「私は必ず無事に帰ってくる。そう心配しないで吉報をまっけてくれ。もし無傷でなかったらののしつてくれてもかまわない」

「ののしるだなんて……」

「お休み、」

弘佐はそっぴい寢室に入ろうとするのを弘？はもう一度呼び止める。

「あ、あの兄上！」

「なんだ？」

「兄上はいまも 金木犀の精霊 を信じておいでで？」

その質問に弘佐は目を見張る。

そう訊ねてくるとは思ってみなかった。

しばらくどう答えようか迷ったが、弘佐はとりあえず口元を微笑み頷いてみせる。

「ああ、信じている。その証拠に院庭なかにわの金木犀の花が枯れないだろう？ そくに精霊が住んでいるのだ」

……といっても、想像することが好きな弘俣ならともかく現実主義の弘？は一笑に伏してしまうだろう、実際、弘俣は信じたが。

「……………私もその金木犀の精霊を見ました」

「え？」

「金髪碧眼で、女神のような娘、そうでしょう？」

「どこで……………見た？」

「あ、その」

とたん、弘？の頬に朱がのぼり、齒切れが悪くなる。

「兄上が中庭の金木犀の前で、その娘と、語らっていたのを見かけて……」

弘佐は苦笑して意地悪げに見やる。

「みていたのか？ 睦言を」

「そういつわけではっ、兄上を探してて、偶然みかけただけのぞき見なんて！！ そ、そんなことより、あの女性が兄上がおっしゃる金木犀の精霊ですか？」

「ああ、…そうだ」

弘佐は目を閉じ、頷く。

（私の次に香霄の主になるのはこの隆道、か）

香霄は知っているのだろうか、そのことを……。

弘？も自分と同じように香霄に好意こういをもったのだろうか？  
だとしたら、少々やけるかもしれない。

「彼女をみてどう思った？」

「私にはまがましい者に、見えました」

「まがましい？」

意外な言葉に弘佐はつい聞き返す。

弘？は不快な様子でいう。

「しかし、どこがとほ言い切れない。

？美しく、たしかに惹かれますが、それが私には受け入れられないのです。まるで『紅娘』とでもいうのでしょうか……」

「紅娘、それはひどい言い方だな」

弘佐はムツとした。

『紅娘』とは男を色香で惑し精気を吸い取り魂を喰らう妖魔のこと

だ。

弘？にはそう見えたなんて。

弘佐は密ひそかにため息を吐いていう。

「私には必要な女だ。<sup>ひと</sup>だから彼女が何者であつても私は構かまわない、たとえ人でなくとも」

「兄上が幼い頃より想いつづけていた者だからですか？」

「ああ、そうだ。それに彼女は紅娘ではない。<sup>とちがみ</sup>社稷だ」

「社稷？」

弘？は理解に苦しむ表情をしたが、弘佐は微笑んでいう。

「彼女は代々王のそばにいて王を、そしてこの国を見守っている存在なんだ」

「よく、かわりません」

「いずれ…わかる、」

——そう、いずれ……。

3

「<sup>びん</sup>？に向かうのね、弘佐」

弘？と別れて寢室にはいると香霄が壁に背を預け、開口一番、そうに訊ねた。

弘佐は首を傾げて袍を脱ぎながら問う。

「香霄は私が負けるとおもっているのか？」

「全然、あなたは強いもの」

けれど、その眼差まなざしは不安に揺れているのを見て弘佐は微笑み、香霄の頬にふれる。

「心配ない。私には君という神がいるのだから」

「一緒に、行けないのよ」

「どうして？」

「その地はまだ呉越ではないから。せいぜい、手助けできるのは国境までよ」

「そうか。なら私の実力で勝ち取るしかないか……」

そう呟いてみても、はじめから香霄に助けてもらおうとは思っていない。

これは呉越国王としての役目であり、国を存続させるための戦だ。香霄は弘佐の瞳を真正面からみつめていう。

「願いなさい」

「え？」

「この戦に勝ちたいと、私に願いなさい。これは呉越のための戦で、あなたの命をとるものではないと約束するわ」

香霄は傲慢な語調でいい、じっと弘佐を見据える。

しかし、弘佐は頭を横に振る。

「私の願いは、ただ一つだから」

「ただ一つ？ それはなんなの？」

うながす視線に弘佐は形良い唇に笑みを乗せて、

「秘密」

「こんな時まで、あなたは！」

香霄は怒りの拳を弘佐の胸に打ち込む。

弘佐は手首を取って回避する。

「どうして、そう願って欲しいんだ、香霄は」

「もし、戦で弘佐が死ぬようなことがあったら、私は存在する理由がなくなってしまう……」

弘佐の優しい瞳に鋭さが宿った。

そして強く胸に引き寄せて、細いあごをすくい自分の方に向かせる。

「それは、私とともに『逝ってくれる』ということか？ それとも私の宣下なしでは、次の王に仕えられなくなるからか？」

「弘佐」

「答えてくれ」

「……王とか社稷だからじゃない、それは関係ないの、ただ、あなたを愛しているからよ」

「誰よりも？」

「ええ、社稷<sup>わたし</sup>をその腕で抱いてくれるのは弘佐だけだもの……それがなくなるのは寂しい」

「私も香霄だけあればいい」

唇を奪い、香霄を優しく抱きしめる。

「弘佐……」

あの夜から何度抱き合っただろう。

肌をあわせるここちよさ、そして安堵感。

けれど切ない。

もしかしたらこの夜が一緒にいられる最後かもしれないのだから。

明日弘佐は???に出陣してしまう。

本当は戦になんか行かせたくない。

兵を挙げて欲しくない。

香霄が民を安んじ、養う神だから人が死に逝くのを忌み嫌うのか

もしれない。

ふと、業火の中の怨嗟えんさが耳に痛くこだまする。

弘佐を抱きしめる手にふるえが走った。

（あのときは、元？の願いだったから、あえて大火を起こした）

……心からの願いだったから。

それでも、あの怨嗟の聲が痛い。怖い。

だから大火をおこした季節きせつがめぐると香霄は深い眠りの中に逃げ出してしまう。

（自分で起こしたことだというのに）

社稷自ら民の命を奪ったという責任から逃れるように眠りに身を任せてしまう。

でも、弘佐がいつも私の眠りを覚まさせてくれる。

強く呼んでくれて、傍に来いと引き寄せてくれる。

鏢<sup>りゅう</sup>でも、元？でもなく、弘佐が。

神と、人——本来ならその壁を越えてはいけない。

愛をかわしてはいけない。

なぜなら、神は人の儚さに耐えられないからというから。

でも弘佐ならいい。

弘佐が幼いとき泣いていた私を慰めてくれた。  
私が視えるのは王か、霊力をもつものしかない。  
独りになると気持ちが暗い方へと落ちていく。

なぜ私が社稷なのか、と。

社稷であることが悔しかったときに。

弘佐が私をみつけて、優しいあの小さな手で涙を拭ってくれた。  
そして、

「私が、……私がもつといいものをあげるから泣かないで」

弘佐は約束通り私に、私だけの簪かんざしを送ってくれた。

約束を違えない弘佐。

それに答えないといけないのに、彼は私になにも願ってはくれない。  
い。

国を楽園にすることもそして福州に出陣することも弘佐自身の意思と行動力?? 私はただ彼のそばにすることしかできない。

でも明日からはそれもできない。

「かならず、私のために帰ってきて弘佐。あ那时的ように私を独りにしないで……」

耳朶みもとにそう囁かさやく。

香霄の、切なる願いを。

？に向かう三万の兵士たちが整然とならび、兵馬都元帥である弘佐を見つめた。

弘佐はきらびやかな明光鎧よろいをまとい、赤いマントを風になびかせる。

腰には鮮やかな朱鞘の刀。

それは弘純ひろずみからもらいうけた日本刀。

若いながらも威風を放ち兵馬都元帥として兵を率いるのにふさわしい勇姿。

「我が軍は今から福州を攻略する、——出陣！」

高々と通る兵馬都元帥の号令に、鬨もろの声をあげ銭塘江を幾百艘の船艦が海へとすべりでていく。

白帆をあげて行く船は、壮麗としかいいようがない。

肌寒い二月の陽射しは眩しく、海面が太陽の光を煌めき弾く。

弘佐はふと、どこまでも高く青い空を見上げ目を見張った。

そこに、香霄が浮いていた。

彼女がはる鴉色の袍は、青の虚空そらにまう桃の花に似て、鮮やかに目立っている。

しかし弘佐にしか香霄の姿はみえない。

「香霄、なぜここに」

たしか彼女は海へでることはできないのではないのではないか？

また無理してきているのだろうか？  
弘佐の心配をよそに彼女は不敵に微笑む。

「呉越に、勝利を！」

いうや、香霄は風を喚ぶ。

帆が風を受けとめ船足が速くなる。

香霄は弘佐の元に降りたって強く抱きしめた。

弘佐も同じように返すけれど彼女は風に融ける。

弘佐はその余韻よいんを心の底から愛しく思い、さらにつよく抱きしめた。

国のためにも、そして香霄のためにもかならず生きて戻る。

夕暮——赤い陽射しをあびて東海の方から船団が現れたと報告があった。

奇襲か！

と、ざわめく兵士たちを弘佐は一言の下、制して船団を凝視する。  
百艘をもひきいる船団……。

統制がとれているが軍船としては少々粗末な雰囲気がある。  
海賊船？ いやちがう。

「あれは……」

「呉越王に加勢する！」

高々と声が海に響き渡った。

聞き覚えのある声。

それは弘純だ。

弘佐は船に要塞を築くように命じ、弘純を出迎えた。

「弘純兄上！ それに晁衡どの！」

「オウ！ 約束通り加勢にきてやったぞ、このために鍛えた奴らばかりだ。福州攻略の先鋭として働く所存だ」

膝について弘佐に礼をとるが、顔をあげて弘純はにやりと笑った。弘佐も力強く笑い返す。

「この戦はきつと勝てる」

5

福州に突如、関の声が響き、大地を震えさせた。

「何事だ！」

福州を任されていた蔡遇はおどろき飛び起きる。そして女牆むすしやうから外をみやり、目をはる。

夜も明けぬ時分に港の方面に火の手が赤々と燃え上がっているからだ。

将校が慌てて駆けつけ、膝をつき報告する。

「い、呉越の船団が港を占領し、軍が押し寄せてきています！」  
「応戦しろ！」

蔡遇は甲冑を身につけ城外に出る。

まだ明けない空を塗りつぶすのは黒煙とまがましい紅蓮。  
南唐の船艦大半が焼かれ燃えている。

「なんと云うことだ！」

ただちに蔡遇と楊業は手勢をひきつれて戦場に向かう。  
多くの呉越兵がなだれこんでくる。

南唐の兵は浮き足たって混乱を期していた。

呉越軍は陸路で？にせめて繰るといふ報告をつけていたからだ。  
蔡遇は兵卒らを鼓舞する。

「弱小の呉越の兵に負けるはずがない！ 圧してかかれ！」

負けてははならぬぞ！

しかし鼓舞に応じる声はとても弱々しいものだった。

## 6

弘佐は自ら血路をひらき、兵を率いる。

人を斬ることをこちよい、とはおもわない。

おもったらずれこそ血だけをもとめる殺戮者にすぎない。

生きるか死ぬか、

呉越を守れるか守れないか、この一戦にかかっている。  
剣が閃き兵士を絶命させる。

降参する兵は相手せずただ刃向かう者だけを倒す。

鬼神か！

と、弘佐の戦いぶりをみて叫ぶ声は味方が敵からもあがった。

弘佐の指揮のもと南唐兵はつきづきと倒れ又は捕虜となり兵を指揮する楊業・蔡遇たちは追いやられ、そして追いつめられていった。業を煮やした蔡遇が楊業が止めるのもきかずに弘佐の姿をみつけて、斬りかかる。

弘佐は血に濡れて切れ味の悪くなった剣を捨てて、腰に差した日本刀を瞬時に抜刀する。

キーンと金属音が高くこだまし、剣を弾いて後に飛び退き、対峙する。

そして双方、血煙あがる地をけって、二閃、三閃と繰り出す。

「これは、いい」

弘佐は日本刀の使いかたの良さに内心感歎をもらした。

剣よりも軽い日本刀がしつくりきて素早く攻防を繰ることができた。

数合、撃ち合い火花が散る。

弘佐の刀の切っ先が蔡遇の甲の緒をきり、地面に甲が転がる。

蔡遇が少し躲すのが遅かったら首を刎ねられていた。

優劣瞭然。

蔡遇は弘佐の剣撃を避けるのに手一杯で、反撃ができない、呼吸が乱れ、弘佐のリズムに乗ってしまっている。

刹那、弘佐はマントを翻し蔡遇の視線を遮った。

「ぐっ」

蔡遇は目隠しを切り裂くが、剣をはねあげられ、スッ、との喉元に弘佐の刀の切っ先が突きつけられ身動きを奪われた。

「勝負あつたな」

弘佐はニヤリと笑い兵士たちに捕らえさせる。

蔡遇は観念して剣をおろし、降参した。

そして息を大きく吸って吐く弘佐を振り仰ぎ名を訊く。

「お主、若いのになかなか見事な太刀さばきだった。ぬしは一体何者だ？」

眉目の整った顔、理知を感じさせる茶色の瞳は思わず見入ってしまう。先の戦いでは猛将を思わせたが。

まさか。

呉越王は二十歳そこそこの若者だと聞く。

先までの勇猛さがおもむろに穏和なものにかわり、弘佐は蔡遇に微笑み名乗る。

「……天下兵馬都元帥、錢弘佐だ」

開運四年（九四七年）、三月。

弘佐率いる呉越軍は張？らの活躍により南唐軍を大敗させる。

挙げた首は一万、楊業・蔡遇等をとらえて福州を獲得する。

これにより、不満をもっていた諸將は弘佐に服すことになった。

だが。

7

「なに！ 福州が呉越の手に落ちただと！」

李景は、報せにきた官吏を怒鳴りつけた。

「途中まではうまくいったはずではなかったのか！」

事実上、ピンは滅び、南唐の手中にあった。

だが、福州節度使に任命した李仁達が呉越に亡命し助けをもとめた。

福州救援と大義名分を掲げられ、呉越に福州および貿易の要の土地を奪われ、南唐軍は生産を生まない山岳部においやられた。

思い描いていた版図が呉越の若輩者に踏みにじられるとは……！

普段穏やかな彼が怒りの形相に染まるのをみて官吏は目を見張り青ざめるが、李？はハツとする。

「もしかしたら呉越は我が国をも取ろうとしているのではないか？」

兵を割て薄手の、今を。

それにいまだ国内にも不満分子がおり反乱の期を虎視眈々とねらっている。

思い描くことのできる『幻の版図』をみているうちに足下をすくわれてしまうのではないか？

李？はただちに国の警備をかためよう諸將に命じた。

——弘佐どうか無事で……。

香霄は弘佐からもらった金木犀の簪をつよくにぎって、祈る。

神が無事を願うというのも不思議だけれど、呉越の土地にしかいられない香霄は祈ることしかできない。

香霄には人の寿命を知る能力は無かった。

もうすこし、格の高い神ならば人の生死にを知ることができただろう。

でもだからそこ香霄は人の生死にを悲しく哀れに想い民たちを大切にできる。

弘佐が帰ってくる、それは疑わない。

でもなぜ、こんなにも胸騒ぎがするの……。

「弘佐……」

そのとき、ピシ、と手の中で小さな音が爆ぜる。

「え？」

手の中に握りしめていた簪に、いきなり罅がはいった。

——どうして？ まさか。

香霄は血の気が引いた。

不吉な予感に。

8

弘佐はただ西の空に沈む夕日を見つめていた。

空が燃えるように赤い。

？江の水面を照らす煌めきの赤い江かわ。

「これで南唐が呉越を攻めることはない、そして」

（私が王としてやり残したことはない）

一時的だが国を守ることができた。

そう安堵した途端、急にだるさが襲って意識が遠のく。

何度かあつた感覚だった。

その度に自分が倒れたらいけないと言い聞かせた。

必死に意識を握りしめる。

けれど、抗えない。

——いけない、ここで倒れては……。

「弘佐、ここにいたのか」

弘純に呼びかけられ、ふりかえると赤い陽射しが眩しく目にはいりすべてを緋色にそめた。

弘純の姿がおぼろげに捉えることができたのは奇跡に近い。

もうひとりいる、晁衡だろうか？

それでもすべてが緋色の中。

「やったな、弘佐」

「ええ……」

「どうした弘佐、顔色が悪いぞ？」

「いえ、なんでもありません。疲れたのかもしれません、すみません。少し休ませてください」

弘佐は踵を返そうとしたとき突然胸が苦しくなり、血を吐く。

息ができない——苦しい——。

「弘佐！」

死ぬのだろうか。

意識がとぎれる前に、香霄の笑みが声に耳によみがえる。

必ず、帰ってきて私のもとに。

ああ、帰る。

香霄のもとに??。

身体が朽ちても魂は貴女あなたのもとに。

——遠い昔にも約束した、巫女、と……。

「弘佐、しっかりしろ、弘佐！」

弘佐のもうろうとした視線は弘純をみていない。ただ誰かの名を、香霄の名を呼んでいる。

「おい、しっかりしろ弘佐！」

「仰向けにさせるな！ 窒息する！」

晁衡は弘純の腕から弘佐を奪い、横にさせる。

「弘佐、弘佐っ！」

「しずかにしろ、兵に知られたら事だ。せつかくの志気を落としかねない」

「しかし、弘佐が！」

「静かにしろと言っている！！ まったく、お前はこういう場面に弱い！」

晁衡の迫力に吞まれて、弘純は膝を折り、不安そうに弘佐を見つめる。

晁衡は切なくため息をついて処置をおこなった。

「無理をなさるからだ……自ら寿命を減らすことはないだろうに、」

その言葉の意味をさっして弘純は晁衡をみやる。

「お前、弘佐が病だと言うことしっていたのか、しっていて止めなかったのか！」

「身体が朽ちても、魂までも朽ちたくはないだろとおもってな」

「貴様！」

弘純は胸ぐらを掴もうとするが、晁衡はそれを払いのける。

「大丈夫だ。死相はきえぬが、濃くはない。お前は張？どのをよんで事を最小限におさめろ、弘佐どののことは私が何とかする」

晁衡は弘佐の血を拭い、寝台へと運んだ。

そして切なく弘佐をみつめて呟く。

「過去世の約束、か……」

## 第七章・願い

1

呉越王、帰還。

——しかし、無事の帰還ではなかった。  
血を吐き倒れた弘佐を何とか、自軍や南唐軍に知られないように  
しての帰還だった。

「兄上はバカだ！　どうしてこんなになるまで！」

「隆道……すまない……」

弘佐は苦笑をうかべて、取りすがる、弟の頭をやさしく撫でる。  
その力のない細い手が痛々しい。

（兄上は本当にこの手で兵を率き、勝利を収め福州を得たのだろうか？）

弘宗はぎゅっと兄の手を強く握った。

いつから血を吐くほどの病におかされていたのだ…！

教えてくれなかった兄が憎い。

けれど、兄の病を察しながら強く出兵を止められなかった自分が  
一番憎い。

悔し涙を流す弘宗に弘佐は申し訳なくおもいながら問いかける。

「隆道、お前は香霄が視えると言ったな、いまも視えるか？」

「……はい」

弘宗はチラ…と、かたわらで、無表情に弘佐をみつめる娘に視線を移す。

白い袷と裙、その上に鴝色の袍をはおり、床に波打つ金色の髪——彼女自身が大輪の華のような美しさだが、今は、感情が欠けているようにみえる。

弘佐が病におかされ寝たきりの状態だというのに、感情をあらわにせず、ただ無表情にみつめ——香霄の碧眼が氷のように冷たく思えた。

「彼女は国の社稷だ。名を香霄という。そして王の願いを叶えてくれるもの……」

「社稷？ 王の願いを？」

怪訝に眉を顰める弘宗に香霄は抑揚なく名乗る。

「私は呉越の社稷——香霄。民を安んじ養う神。民を統治してくれるもののそばにある。 錢鏐は私に『長寿』を願い、錢元淮は『欲望の浄化』を願った。私はいずれもその願いを叶えた」

「欲望の浄化？」

「六年前の大火のことだ」

「じゃあ、あの大火はお前がおこしたもののなか！ あの大火のせいでどれだけの民が苦しい思いをしたか！ ——なにが社稷だ！」

弘宗は烈火の如く怒り、香霄を激しく罵るのを、弘佐の鋭い声が止めさせる。

「隆道やめろ、それは先王の願いで私たちはそのことがあって 樂園をつくるという目標を得たのだから」

「しかし！」

「いずれにせよ、この香霄が見えると言うことは私の次に王になる

のはお前だ」

「そんな……私は王の器ではない。

兄上のように寛大ではないし、それに私の望みは兄上の補佐をすること。兄上が死んでしまったら意味がない！」

「隆道、私もそう簡単には死ぬつもりはない、だから安心しなさい」

うろたえ激しく頭をふる弟に弘佐は安心させるように微笑み、愛しげに彼をみやった。

「隆道は、昔から私の事で泣く」

「それは、兄上が心配ばかりさせるからです」

そつだろつか……いや、そうだな。いつも苦勞をかけてすまないな」

（隆道はつねに私のそばにいたがる）

いや、私のほうが、つい隆道に甘えてしまうのかもしれない。

信頼できる臣、そして大切な弟だからこそ。

私に大事あると涙するのは嬉しいが——私が死んだら、この弟は私の影を背負うことになってしまふのだろうか。

弘宗には悪を憎む心が強すぎ、些細な失敗を許す度量がいささか欠けている。

そのことがきっかけにならずに、臣民を穏やかにまとめてくれるならいいのだが。

不安をため息に溶かして弘佐は弘宗に後のことを頼む。

「私はこのような状態で政務もままならない、……政務のすべてを委任する」

その強く命じる語調に弘宗はためらいながら膝をつく。

「……謹んで、拝命します」

（兄上に、これ以上無理をさせられない）

その思いが強く占め、拝命したが弘宗はハッ、とあることに気づき、つよく香霄の肩をつかんだ。

「香霄、私の願いは兄上が生きながらえることだ。王になったら私の願いをきいてくれるのだろうか？」

「それは…本当の王にしかできない願いしかかけない……私は弘佐の願いを叶えていないし、正式な宣下ではないから、無理よ。それに宣下すれば、その時点で弘佐は死んでしまうもの……」  
「ではどうすればいい？ 香霄、そなたを殺せばいいのか！」

弘宗は腰に帯びた剣を抜刀し、殺気を含んだ目で香霄を睨む。

「そんなもので、私を殺せないわ」

「わからないぞ、私はそなたが視えるのだから……王の願いを叶える代償はその命とし、国の未来を挫くというなら、紅娘となんら変わりない……」

「隆道、やめろ！」

弘佐はふたりの間に入ろうとするが、弘宗が声を張り上げ制す。

「このものが王の、兄上の命を奪い取るなら私はこのものを斬るしかない——社稷などいなくとも国は立ちゆく！」

香霄は剣の切っ先をみつめ、傲慢な口調で言う。

「——なら殺しなさい。私は、あなたのいう紅娘かもしれない」  
「……」

弘宗は香霄に剣を振り上げた。

「——隆道、香霄！」

——間に合わない！

しかし、

「やめてください、隆道兄上！」

二人の間に身を呈して割り込む人物がいた。

「文徳？」

剣を振り上げたまま、呆然と弘宗は弟の字を呟く。

「どのような理由があろうと人を殺めるなど、なりません！」

どうやら弘俣は騒ぎをききとめ入ってきたらしい。

弘宗は剣をおろして啞然と問う。

「……お前、この娘がみえるのか？」

「？　それがなにか？」

弘俣は不思議そうに首をかしげた。

2

弘佐は、香霄とふたりきりになりたいと弘宗と弘俣を下がらせ、ポツリと呟く。

「文徳も香霄の姿が視えるとはおもわなかった。もしかしたら、隆道の治世は短いのかもしれない……」

「かも、しれないわね」

「香霄？」

「弘佐、あなたは私になにか願った？」

泣きそうな声で訊ねられ、弘佐はハツとする。

碧い双眸から涙がぼろぼろとこぼれ落ち、頬を伝っていた。

「今まで、表情がうかがえなかったから、私は飽きられたのかとおもって、内心冷や冷やしたが、もう、我慢しなくていい」

涙を優しく拭う弘佐の手を香霄はとり、強く頬に押し当てる。

「私は弘佐の願いをきいたことはない！

すべてはあなたの強い意志によって国は豊かになり、福州を得たの。

そう私はなにもしていない、ただ弘佐の傍にいただけ、見守っていただけなのに、どうして弘佐が死ななくてはいけないの！」

声が涙につぶれ小さくなり嗚咽にとつてかわる。弘佐は落ち着くまで香霄の髪を優しく撫でた。

「……私に強く願ったら死ぬ、それが王の個人的な願いなら。代償は王の命で購われる。弘佐はそれをわかっていていまままで私になにも望まなかった、それなのにどうして……、」

「香霄を望んだ、からかな？」

「私を望んでいた？」

「はじめて逢ったときから私は香霄の傍にいたい、と望んでいたんだ」

「そんな……！」

弘佐は香霄を胸に引き寄せ、クスクスと笑う。

「もしかしたら香霄は自身を望まれるとわからないのかもしれないな」

弘佐も……予と同じ運命をたどるのだろうか……

ふと、元灌の言葉をおもいだす。

(……同じ運命?)

弘佐も、私を望んで死ぬという、同じ運命だといったかったの？

それが『きつかけ』となって王に願いを叶えさせると……？

でも違う、

弘佐はなにも私に願わなかった、

ただ、望んでいただけ。

私が傍にいることを。

弘佐と元灌は違う。

そう、懸命に否定するけれど、弘佐が呟く。

「私は父と同じおろかものだな」

「どうして？」

「……民のために願えば、生き長らえたいと思えばこそ……なのに、私は常に香霄を望んでいた、楽園を創ることよりも香霄が私の傍にいることが、私の真の願いだったのだから、——ッ！」

「弘佐！」

弘佐は苦しく咳き込み、口を押さえる。  
手が赤く濡れていた。

「あまり……、長くはないな」

自嘲気味にいい、強く香霄をだきしめる。弘佐の震えが強く伝わった。

「香霄、怖いんだ」

「……………死ぬことが？」

「違う、君とともにいられなくなることが、だ」

香霄はハツとして弘佐を見やる。

「香霄といられないと思うとつらい、王であり続けないと君の傍にいられないから……」

「なら……私に『長寿』を願いなさい。弘佐はまだなにも願っていないのだから」

「でもそうしたら香霄の姿を視ることができなくなるんじゃないか？ お祖父様は君の姿をみることができたか？」

「——それは……」

感じることはあっても視ることはできなくなる。

また香霄はひとりになり、寂しくなるけれど弘佐が長らえてくれるならそれでいい。

私の願い。

弘佐のそばにいることも叶う。

「願いなさい弘佐。民はあなたを望んでいるのよ？ 楽園を創るのでしょうか？」

やさしく諭すけれど弘佐は首をふって頑とゆずらない。

「私は香霄が見えなくなるのがいやだ。こうして抱けないのもいや

だ。わがままかもしれないけど——いやなんだ」

「弘佐、私は、」

「香霄は私のそばにいるのはいいか？」

「そんなことはない！」

「なら私は最期まで香霄の傍にいたい」

「弘佐……」

次の王は弘宗だろう、でも弘佐の宣下なしでは弘宗に仕えることはできない。

でももし、弘佐が宣下しなかったら私は社稷ではなくなり——土地に縛られることはない。

でもそれは滅びることを意味しているのだろうか、それとも次の為政者を見いだすまで眠りに落ちるのか。

けれど、いまの私は弘佐がいなければ、《存在の意義》はない。

弘佐は私と居続ける手段として王になった、なら私は——……。

「弘佐、弘宗に王の宣下をしないで」

「香霄？」

「私も社稷ではなく、ただ弘佐の傍にずっといたい。私の王は貴方……弘佐だけだもの」

そういい、弘佐の不安を溶かすあまく切ないキスをかわした。

——黄希と呼ばれ振り返る。

黄希——その名は香霄がくれたもの。

その名を香霄に呼んでもらえることが嬉しかった。

私は微笑みを返事とする。

手を伸ばせば、彼女に触れられるのに、けれど触れられなかった。

——いや触れてはいけない存在。

きつと触れれば姿を見ることが叶わない女になってしまつ。

なら彼女を見守る存在であり続けたい。

——それしか、許されない。

でも、そう望むことで、彼女への恋慕は強くなるばかり——。

3

「——兄上、晁衡どの、日本国はどのような国なのですか？」

見舞いにきたふたりに弘佐はそう尋ねた。

季節は四月節——立夏になっていた。

空気を入れ換えるために開けられた窓から、清々しく澄んだ青い空がみえる。

風の色も違う、穏やかで暖かい、その風のひと撫で眠りに誘われる。

ふたりは晁衡の術のお陰でいまでも誰にもとがめられず宮殿に入りすることができ、弘佐のもとを訪れる。

弘宗のように体調をすぐく気にするわけでもなく、晁衡はいつもの薬をつくって弘佐に飲ませ、弘純は旅したいろいろな国のことを語ってくれる。

それがふたりの弘佐への気遣いなのかもしれない。

弘純は目を瞬かせて弘佐をみやる。

「――聴きたいのか？」

「ええ、日本のことを兄上は語ってくれませんか……ああ、兄上はあまりよい思い出がありませんか？」

そつだ、弘純は日本国の海賊だった。

総領は討たれ、息子とともにさらし首にされたと晁衡から聞いた。

弘純はあごを撫でていう。

けれど瞳に深い哀愁が浮かんだ。

「――いや、思い出はたくさんあるが、悲しいこともあったから……。しかし時がだいぶ過ぎたし……聞いてくれるか？」

「はい、ぜひ」

「――そうだな、俺は都のことはあまりしらないが、日本自体はとてもきれいだ。静かだし山野が豊かな緑をたたえている。

呉越はほぼ一年中春のような気候だが、日本は四季折々で、春は桜が咲き誇り、夏は陽射しが眩しく濃い緑が萌え、秋は紅葉し、山野を赤く染め上げて落ち葉が舞い、冬は雪が駉々と降り積り、春日とともに雪は溶け再び桜の花が咲き乱れる」

兄の縷々とした語りに、日本を思い描く。

弘佐は美しい光景を臣民とともに見るのが一つの楽しみなのだ。

そんな弘佐の羨望の眼差しをちらりと見つけて弘純は苦笑する。

「あと面白いと思うのが婚姻様式だな。和歌をおくりあつて結婚をする。  
うたがき

歌垣うたがきといつて満月の日に若い男女が大勢集まつて歌を送り合つて結婚するんだ」

「親とか身分とか関係ないのですか？」

「まあ、だいたいはな」

「へえ……」

「——この国からみたら遅れているようにおもつかもしいないが、  
——俺は好きだ」

「私は、逆だな」

晁衡がぼつりと、いう。

「都にいたからかもしれないが、都には魑魅魍魎が跋扈していて、  
落ち着かなかった」

「魑魅魍魎……？」

弘佐は首をかしげて反芻する。

「まあ、言つなれば心の闇とでもいうのか。」

——貴族も民もそれにおびえて、自分の意思というものが薄く感じるのだ。

……占いを信じていて、そのとおりに行動する者が大多数。

まあ権力者だけは財産を得ようと必死だが」

「そういえば、晁衡どのの母上は人ではなかったと訊いたのですが  
本当ですか？」

「だれから訊きいた？」

「私よ」

弘佐のそばにいる香霄が主張した。

「あなたが私と初めてあつたとき『私の母がそなたと同じような者  
で』といったのを今でもおぼえているわ」

香霄は晁衡の口まねをしている。

それをきいて晁衡は拳を口元において苦笑する。

「そんなことも言ったな……まあいいか。——私の母は霊狐だ」  
「霊狐？」

「ほう、だからつかみ所のない性格をしているのか」

晁衡は弘純の軽口を無視して続ける。

「こちらでもよくきくだろう、狐が人間と結ばれる話を。まさに私はその申し子。ただ母は普通の霊狐ではなかったようだ……」

（きつと晁衡の母は楠葉）

香霄はそう直感し、とても懐かしくおもう。

ここ数日、手のひらから零れていった、人だったときの記憶を戻りつつあったから。

楠葉は東の島に渡り、人間に恋をしてこの晁衡を成した。

だから彼は私を視ることができ、不思議な力を受けづいたのだらう。

香霄は懐かしくも切ない気持ちを懐きつつさらに訊ねる。

「どうやって、あなたの両親は出逢ったか聞いている？」

「これもよくある話だ。傷を負った母が父に命を助けられ、恩義を感じ、独り身だった父のもとに人間の女に化けて世話をしているうちにふたりは恋に落ちて夫婦となり、そして私が生まれた。

しかし幼かった私が母の正体を見破ってしまったせいでふたりは二度と会えなくなってしまった。なぜなのかは知らないが」

弘佐は手の中にある品茗杯を見つめて呟く。

「ではこの薬は晁衡どのお父上が病におかされたとしりお母上が煎じた薬なのですね？」

「そうだ、だから普通の薬よりとてもつよい。霊狐葉で作ったものだから」

「人と人ではないものが結ばれることはあるのね」

「なにをいう、神と人も結ばれ、子を成すこともある。しかし、神は人の儚さにたえられないため滅多に交わらない。神は不死なるものだからな」

香霄は複雑な表情をうかべて黙る。

香薷も小霸王の子を成した。

彼女は子を成してしまったから愛しい者とともに逝くことをあきらめ、母としての生涯を全うした、忘れ形見を愛おしむ道を。

（でも私は弘佐とともに逝くことを選ぶ）

もう、待つことはできないから。

晁衡は思い詰めた香霄の表情をみつめ、おもむろに席を立つ。

「香霄、すこし話がある」

「え？　ここじゃいけないの？」

戸惑う香霄に、珍しく茶目っ気をだして片目をつぶり、人差し指を唇にそえる。

「たまには兄弟水入らずにさせようとおもって、邪魔者はこちらだ」強引に晁衡は香霄の腕をつかんで、隣室につれていく。

「え、え……じゃあちよつといってくるね」

「ああ、気を遣わせてすまない」  
それを見送り弘佐は弘純に訊く。

「兄上はいまでも、香霄の姿がみえますか？」  
「いいや、見えない。だがこちよい風を感じるからいることはわかる」

こちよい風――。

さすがは風に任せて海に行く兄の言葉だ。

弘佐は窓越しから、形の良い雲が浮かぶ空をみつめて静かに告げる。

「……兄上、私の次に王になるのは隆道です。どうか助けてやってください」

「弘佐、俺は気ままな海賊だ、約束事をするもんじゃない」  
かるく弘佐の額をこついて、そつぽを向く。

「では私がこの国を守るしかないですね。この国にも反乱の種がないとは言いませんから……それしかないか」

「なにか、思い当たることがあるのか？」

「文徳も香霄の姿がみえるのです」

「弘俣も？」

「……なにこともなければよいのだけれど」

ため息をついて肩をすくめる弘佐をみ、訝しげに訊く。

「弘佐、お前そこまで国に尽くすか？」

弘佐はゆるり、と首を振った。

「いえ、心配なだけです。……そうですね、もし私が王でなくなったら、香霄と一緒に旅がしたい。

そつまずは日本国を見てまわりたいですね……」

「弘佐、お前は暢気だな……」

弘純の声は哀愁を帯びていた。

『自分の命の代償に民が安らげればそれで良いそうだが、弘佐どののはなぜ、弘佐の夭折の相をみ、発病をしていること、知っていないがらを止めなかったのかと晁衡をといつめたら、弟はそう答えたそうだ。』

『王として』弘佐が大切に思うのは 民の社稷 なのだろう。

それを挫いてしまったら弘佐はこの世にいる意味をなくしてしまう。

たしかにそうだが、『弘佐自身』の幸せはいつたいどこにあるのだろうか？

弘佐の私欲は、やはり弘佐の想い人である香霄にしかないのだろうか。

「……………弘佐、お前はこの短い人生を楽しんで生きてきたか？」

その問は、いつのまにかひとときの眠りにおちた弘佐には届いていなかった。

4

日本刀を突きつけられて香霄は背筋に恐怖が這うのをしった。  
普通の刀なら香霄を傷つけられない、けれどこの刀は違う。

——神刀だ。

異国の神の力が宿っているのがわかる。

この刀なら香霄を消滅させることができるだろう。

「……なんのつもり、晁衡？」

「香霄を殺せば、弘佐どのは長らえる、……とおもう弘宗どこの思いは解らぬでもない」

抑揚なく晁衡は告げる。

晁衡は私を殺すためにここに呼んだ。

この結界を巡らせた場所に。

透かし窓からさんさんと陽射しがさし込む部屋なのに、薄ら寒く感じ、空気も重苦しい。

不気味な重圧感があつた。

神を捕らえる結界というのだろうか、これは。

香霄はキツと晁衡を睨みう。

「私が消えたと知れば弘佐は私のあとを追って自害するでしょう」

「フツ……、そこまで愛されている自信があるか？」

「あるわ。私は弘佐のために死ねる。私が死ねば弘佐が長らえるなら喜んでこの命をささげるわ」

晁衡は大きなため息をついて刀を赤鞘におさめ卓におく。

「……冗談だ」

とても冗談には思えなかったが、彼から殺気が消えた。

「すこし私の話をきいてもらえまいか？」

「話？」

「これは弘佐どのにも話したことだが、私は生まれつき人の生き死にを知ることができたからそのうち、私が寿命をあやつるようになり

われはじめた。私は、私に対する畏怖の眼差しに耐えられず……日本に嫌気がさした」

「晁衡……」

「だから大陸に渡った。今、大陸は血で血をあらう乱世。

まあ……日本も、骨のある者がいて理由はともかく朝廷を相手取って兵をあげたおろかもいたが……比が違う。

なまぬるい。

私はもつと広い世界を見てみたかった。

しかし日本は事実鎖国している、『巨海』にでることは許されていなかったから、私は藤原純友の乱に乗じて杭州にきた。

しかしここは、この国の人々に死相はなかった。

乱世のただ中にあるのに、だ。

まあ、天命や病はともかく悲壮な運命は見受けられない……ただ一人を除いては」

「それが、王……弘佐だというの？」

「ああ、」

「……王の願いの代償がその命だから？」

「いや、弘佐どののもとからこの国の贄だった」

「贄？」

「……時の贄とでもいうのか、時は覇者をのみこんで新たな渦を生む、この国はそうやって歴史を生みだしてきたのだろう？」

「でも私は弘佐の願いを叶えていない、弘佐は一度も私に願いはし

なかった！」

「そうだろう。弘佐どのは強いし、それに私は釘をさした」

「釘？」

「真の願いは心の奥に、と」

香霄はハッと彼を見やる。

「だから弘佐は私になにも願わなかった？」

「いや、彼は願うより自ら行動に出た方が早い、という思考の持ち主だろう。」

だが…弘佐どのの夢が現実になるのが急速すぎる。

香霄、弘佐どのの 楽園を創りたい という想いを感じ取り叶えていたのではないのか？」

「……違うわ、弘佐は、」

晁衡は香霄の言葉を最後まで聞かず、彼女の髪に挿す簪をスッと抜く。

金色の艶やかな髪が床に波打つ。

「なにを……？」

「罅かはいってるな」

晁衡は怪訝に呟いて、ため息を吐き、簪の枝を指先でくるりと回す。

「これには香霄の力を封じる呪をかけておいたのだ」

「——っ！」

香霄は晁衡に憤り言葉が出なかった。

彼は私の力を封じて弘佐の願いを聞き取る能力を欠けさせていた。もし気づいていれば、弘佐が病だと言うことも気づくことができたはずなのに！

キツ、と強い瞳で晁衡を睨む。

「すべて見透かしていた？ 私が弘佐の命を縮める存在だと、社稷とは名ばかりで死神だと考えていた？」

「念のためだ。しかし、香霄自身が死神だと自覚していたとはな」  
冷やかに晁衡はいう。

やはり、晁衡はすべてを見通し、所々に布石を打っていた。  
けれど結果的にすべて巧みにさけられ……。

「私のせいで弘佐は死ぬの？」

「……違う。」

この罅は香霄の想いによって生じたものだ。弘佐どのの無事を祈る願掛けとして……。

それに弘佐どのも福州を得るまで死ねないと気力だけで動いていた。

それを支えていたのはお前の想いと弘佐どのの意志。

以前、私が弘佐どのをさらおうとしたのは、彼の行く末を垣間見て、哀れだと思ったからだ」

晁衡の瞳に悲しみがよぎる。

「大陸から離せば弘佐どの为天逝にしなかった。——そう……私は彼の運命を変えたかった。死相などの運命の輪がすこしズレればきえるものだからな。しかし弘佐どのの強い意志の前に負けてしまった。

その意志は運命の輪を正常に動かす結果となってしまうたが……。しかし、それでも私は弘佐どのには死んで欲しくないと望んでいた。

た。

でも私は……無力だった。

大陸に來ても私は予言するだけの力しかもっていなくて、弘佐どの運命を変えることができなかった。

だが、——この世の樂園をつくるという強い意志をどうして挫くことができようか」

## 終章・旅立ち

1

部屋に戻ると弘佐は眠っていて、弘純と晁衡は邪魔にならないようにと帰っていった。

香霄は愛おしく弘佐の額から頬を撫でる。

まるで子供のよう。

なんども、愛おしく。

こちよく眠って、安らぎに包まれている。

どんな夢をみているのだろう。

よい夢？

私は弘佐の成長をずっと見守っていた。

十にもならない弘佐に姿を見られたことには驚いたけれど、嬉しかったのは本当。

ある意味、孤独だったから……。

けれど、弘佐はまだ二十なのだ。

二十年しか生きていない。

まだこれから先、未来があるはずなのに。

もしかしたら弘佐は天下を治める器を有していたかもしれないのに。

限らない夢はあったはずなのに。

でも弘佐は死をすでに受け入れている。

「どうして？」

はらはらと涙がこぼれる。

儚い、人間の命はなんて儚いのだろう――。

神の時間からいうと瞬く間しか弘佐は生きていない。

「香霄、また泣いているのか？」

弘佐の指が香霄の涙をすくう。

「起きていたの？」

「いま起きたんだ。香霄に呼ばれて」

「私は呼んでないわ、ただ寝顔をみていただけよ」

「そうか？」

弘佐は香霄の表情が暗く沈んでいることに気がついた。

「香霄？ どうした浮かない顔をして、微笑んでいて欲しい、ずっと……あの時のように」

「あの時のように？」

弘佐は優しく微笑んで香霄の頬を包むように手を伸ばす、そして

「黄希と香霄に呼ばれていた」

どくん、と強く鼓動が高鳴る。

「あの時の夢を見ていたんだ。短い時間だったけれどとても幸せな時だった。香霄には触れられなかったけれど、ただそばにいられたから。でも本当は触れたくて、抱きしめたくて……仕方がなかった

んだ。花月の邑で僕はあなたにずっと焦こがれていた」

「あなたは、黄希、なの？」

弘佐は微笑みを浮かべ頷いた。

「いまの私は弘佐でも黄希でもあるんだ」

「どういうこと？」

「福州で倒れてからずっと、夢の中で君を見つめている男になっていた。嬉々とした君をただ見つめているだけで幸せな黄希に。でも心の内では抱きしめたくて仕方がない私がいた。だから、どちらか夢が現か解らなくなってしまったことがあったけど」

「そんな……黄希は私の命を得て生涯を全うしたはずよ、どうして……」

「強い想いは時空を越えて残るんだとおもっ」

それに。

「香霄は約束した……。ともに逝くと、いま、その願いを叶えることができる」

「——そんな……」

こんな事があっていいのだろうか。

私の手から滑り落ち、失われた記憶や思い出が、金の糸を織るようにつながり、形となって現れていまここにある。

弘佐の命が紡がれ私の約束を守るため、私の最期の願いを叶えるため。

その願いさえなければ、弘佐は。

（今思えば、それは夢く、そして残酷な願い）

香霄は強く弘佐を抱きしめた。

強く抱きしめることしかできない。

後悔や愛おしさ、切なさ、全部を抱きしめることしか……今度こそ手のひらから、こぼれ落ちないようにと。

弘佐も香霄を強く抱きしめ耳朶に囁く。

「香霄と旅がしたいな……そう、まずは日本国へ渡りたいと思うのだけど、どうかな？」

「ええ、そうね……」

二人、風となって碧い昊を巡り広い世の中を見守ろう、二人で……。

ただ穏やかな時が流れる……時を惜しむようにただゆつくりと。

弘佐が微笑み、香霄がそれを返す。

それが一つの永遠のように。

ただ願わくは穏やかに時が流れますように……。

六月、夏の風が巡めぐる。

弘叔は中庭の金木犀を見つめていた。

以前この金木犀に精霊が住んでいるので花が散ることはないと言  
から聞いた。

一枝、手折り、兄におくろう。  
きつととても喜ぶから。

突然、

強い風が吹いて、手が触れるまえに金木犀の花々が空に舞い散っ  
た。

風に舞い上がる金色の小花。

大空に吸い込まれるように……。

東の空へ旅立っていった。

弘純は青い空を見上げた。

波の音が強くこだまする船上だが、どこまでも澄んだ青い空を見  
上げるとすべてが遠くの出来事のように思えた。

弘純は同じように高い空を見上げる晁衡のそばに歩み寄り、彼の  
手に握られているものに目をとめる。それは玉でできた金木犀の簪。

弘佐が香霄に贈った簪だ。

「晁衡、」

「せいめい  
清明とよべ」

「え？」

「もう、私は呉越に行くことはあるまい。日本にとどまる。『晁衡』という名はもう使わない」

その漆黒の瞳を空から紺碧の海へと馳せる。

しかし彼の心は違うところにあることを弘純は解る。

きつと、今、自分と同じところに想いがある。

もう生きて会えることのない者への哀愁。

弘純は大きく息を吐いて、強く晴明の背を叩いた。

「……俺にとつても、お前にとつても長く、そして楽しい旅だったな……、」

晴明はふりかえり、弘純に微笑み返す。

「ああ、そうだな……」

皮肉ではない、彼本来の笑みで。

簪が、キラリと宝玉を滑るように輝いた。

その宝玉が映すのは紺碧の海と空。

まるで嬉々と輝く。

昔、一時だけ船にのり、海の青さに、広さに感動した少年の瞳によく似ている。

晴明はふと、切なさや心を占めるのをしり、それを隠すために唇に笑みを刻んで簪にささやきかけた。

（今から私たちともに日本に行こう、弘佐どの……）

私はあなたを、日本に連れて行きたかったのだから。

きつとそこは、あなたが望む美しい世界がまっている。

そのとき暖かな風が吹いた。

心地良い風が、昊に碧く。

了

## 終章・旅立ち（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。ちよくちよく校正をかけていきますので今後とも宜しくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2847x/>

---

昊に碧く

2011年12月17日20時52分発行